發句蒙數集

へ 5
1860
1

参玉庵康年撰
八雲東濵校

發句萬歌集

一名歌袖子

全四冊

へ5

参玉庵の康年あるじふところあそこへ
なにはまでよりの海のたまむすとと
うきは俳諧兎陶治してころ孫のちぎり
をあさんと企てつるをゆくりなく
病にかゝりて伊豆の湯山乃ゆあみに
まかるとて出立るのちそのゆくへさらに
世に聞えぬこのあまぐさへもつ

草稿をいだしていはくせゐけしとりあゐ
これハ雲州出雲人山家の
東濱なん隱鷹なるものさしをたる
こゝろえたるふみにて校訂を
加へ一集としてその社中
のまだ出さぬ鳴呼のおかしかり
までまえたるおかし作代なるを何卒

こしらへてさゝやかなるをおとなしく
古物とまらしとその草稿の跡にて東濱
か題あるはことしいとまあるハよろこばし
つゝ但やその集のおもてまへなる
務ハ東なる人おのつから志ある庵し
なむて保十二年春

一九老人

凡例

一 ちかころ世に句集多しといへとも あるひは今人のミを
集めあるハ古人のミをあつめたるのみ 古今の句を
撰出するもの千数あまりなれとおのれおもひては数の
たらさるをなけきし 此ころ人々より 諸集をあつめ
あるは類題を出したるもあり同句あまりていかはかりつらね
浅ましき類題今此類題の子を世にひろめいはす原氏
其角嵐雪野坡去来丈草許六支考なとはいはすもかな
中頃は蕪村暁台闌更白雄蓼太士朗道彦
乙二月居万和寒松ありいまは其餘故人數百家在
世のなかの家々人毎に數百句をあつめたれは類によりて

誹句をあつむるに古の集わの帖をくりのへして桃青と
せられし頃の作者は新ら調家は流行
一瞬の間に安からしめ句集の惜まれけるにわれなれは新を
らく此書にはもれぬへし

一 類題は猿山の井四季部類なとに限りて世に行はるゝあれと
貞享元禄の頃よりしては今の天保年間に至る先哲の
句をあつめて四季のわかち天象にて象につけ
植物の部も意をつくしつけて人や畜類をむ雑を集れ焼
類の前後に志すものは意をしるへし

一 句順は年暦を抑し 又は名人上手未熟とわかつことを
せさるは雅爽なりしまは奥志しめひのつくしの果より
きのこえたる文の句まてもつけて筆記しおきたるは織を
かさし おのつから広く諸家の文房をさくりて其家の集
或は家の日記等をも見得て書次するなれは料のつまり新古の
順を逐ふ事ないかしなん

一 作者の国所をしるし其一句にも志るして二句めよりは志る
されと同名の人あまたあらはしけれとも其のしるしを書
あれをしるさん

一 これまでつくし月並庵のあつめしをもまたこゝに金玉を求め尽さねば
言葉の数をつみて類題とわけ其部分やけるとせんとするは
なほしり漏しいと物を尽さんとしてもまたもれし事稀
ありけるを今度又ひろくそのあいだもれしを集むれば四方の
人々まで学び得たる句ともを出し加へぬれば又まてまたは数千の
たびの知らぬ人までも広く集めぬる事のきはまりなきにあつけて
見ゆるしたまへかし

一 此集をし以て類題を上梓するの世話を出精にいたされける
手ありて萬代集と題しこれをながくおさめて萬歌集
と改むるなるべし

[illegible] 敬人 しるす

發句萬題集春惣目録

春之上

正月 初丁　元日 二丁　元朝 三丁
睦月　元日
歳旦　立春　初空　初日
初鶏 四丁　初鴉　初霞 五丁　明春
今朝春　御代春 六丁　庵春　老春
江戸春　花春　初春　年始
御慶　年礼　年玉　初夢
初東風 八丁　祇園削掛　歳徳神　四方拝
門松　輪飾 九丁　注連飾　楪
歯朶　餝臼　掛蓬　穂俵

若水　雑煮　屠蘇 十丁　歯固
大箸　蓬莱　餧積 十一丁　數子
螺肴　庭竈　福藁　飾炭
初暦　書初 十二丁　寢積　恵方
御降　二日　三日　馬乗初
弓始 十三丁　着衣初　松雛子　謡初
藏開　年男　水祝　子日
小松曳 十四丁　若菜　七種 十五丁　薺
芹 十七丁　佛坐 十八丁　五形　薺粥
松内　松過　飾焚 十六丁　若夷
萬歳　大黒舞　鳥追　春駒
傀儡師 十九丁　猿引　縣召　初芝居
破魔弓　遣羽子　手鞠 廿丁　宝引
福引　踏歌宴　畚下　鏡餅
若餅　福涌　粥杖　左儀長 廿一丁
爆竹　綱引　節振舞　御忌
店卸　福壽草　蕗薹 廿二丁　水菜
鶯菜　下萠　莖立 廿三丁　若草
木芽　草芽　蔦芽　芦角
藤芽 廿四丁　梅　紅梅 廿九丁　白梅
柳　刺柳 卅三丁　椿　鶯 卅五丁
百千鳥 四十丁　白魚　蜆 四十二丁　鮯

蝌蚪　養父入　海苔 四十二丁　海雲 四十三丁
和布　餘寒　春寒 四十四丁　冴返
霞　東風 四十六丁　春風　残雪 四十七丁
春雪 四十八丁　淡雪 四十九丁　雪解　雪間 五十丁
凍解　氷解　氷温　暖
麗　長閑　佐保姫 五十一丁　山笑

春之中

二月 五十二丁　衣更着　二日灸　初午 五十三丁
事納 五十四丁　薪能　涅槃　西行忌
彼岸 五十五丁　貝寄風　朧月　朧夜 五十六丁
春月　春夜 五十八丁　春宵　鷹化為鳩 五十九丁

泊狩　鳥囀　鳥交　鳥巣 六十二丁
巣立鳥　鷺巣　雉子　燕
呆鳥　白鳥　鸎　駒鳥 六十三丁
春鴈　帰鴈　雲雀 六十四丁　親雀 六十六丁
雀子　春鳥　蝶　蜂 六十八丁
蚖 六十九丁　蛙　田螺 七十一丁　初鰕 七十二丁
飯鮹　寄居虫　地虫　猫戀
春鹿 七十三丁　孕鹿　鹿角落 七十四丁　陽炎
糸遊 七十五丁　初雷　初虹　鳳巾
出代 七十七丁　焼野 七十八丁　山焼　畑打
田打 七十九丁　苗代　種下 八十丁　種蒔

水口祭 種芋 獨活 蕨
土筆 八十一丁 杉菜 嫁菜 胡葱
虎杖 八十二丁 五加木 春草 蒲公英
薊 八十三丁 苣 菜花 大根花 八十四丁
五百草 山葵 烏芋 八十五丁 櫻苗
菊苗 刺木 接木 松花 八十六丁
初櫻 八十七丁 初花 待花 八十八丁 彼岸櫻
糸櫻

春之下

三月 八十九丁 弥生 上巳 曲水
雛 紙雛 九十丁 桃酒 草餅

鶏合 寒食 九十二丁 汐干 安良祭 九十三丁
壬生念佛 御身拭 峯入 永日
遅日 九十四丁 春日 春空 九十五丁 春夕
炉塞 茶摘 桑摘 九十六丁 蚕
山櫻 櫻 九十七丁 八重櫻 百丁 遅櫻
花櫻 百一丁 花盛 百五丁 散花 百六丁 花雲
花曇 百七丁 花雨 花吹雪 百八丁 花見
花守 百九丁 桃 梨子花 百十丁 海棠
辛夷 躑躅 山吹 百十一丁 木瓜 百十四丁
沈丁花 木蓮花 李花 杏花
連翹 榛花 百十五丁 五加木 櫻草

小米花　はこ座　菫　茅花　百十六丁
青麥　草麥　三月菜　茗荷竹　百十七丁
春菊　藤　萍初生　百十八丁　蛇出穴
鼠化為鴽　麥鶉　鷹巣　郭公巣
鷲巣　入雲鳥　鳥歸　呼子鳥
引鶴　百十九丁　引鴨　うくゐ　櫻鯛
若鮎　春霜　別霜　春雨　百廿丁
春山　百卅二丁　春野　春海　百廿七丁　春水
春旅　百卅四丁　夏隣　夏近　行春　百廿五丁
暮春　惜春　春別　春送
三月盡

發句萬題集春之上

冬至庵康年輯

八雲東溟校合

正月

正月は奥のかしらや炭俵　傘下

正月を傘さしてまはるしらき　成美

正月やわきもわきてあれは八袖五月　乙二

正月に皆の装束なく月秋られ　道彦

正月や酒を仕舞ふて雨ふりける　一具

正月をさしてまほらの京の邪　下総　仁里

正月やかくれも酔て夕月能　万子

睦月

正月とて正月はなかりけり那　岩上　二丘
正月や始末のならぬ妻所　根合
正月や何ふ足なき梅柳　江戸　美須
正月やあふせて数ふ用の足む　下総　素風
正月や立居て見ず来てみ　江戸　永光
蒲団より正月めかぬ巨燵　伊勢　外国
梅と居て正月の来る畑　嵐外
十年つゝ月や睦月の古手売　之兮
人となりて出たり睦月かな　陸奥　多よめ
若ぬれて松之とかぬむ月かな　下総　梢山
榛の木に出初し月のむ月かな　江戸　梅令

元日

墨の字は真紙入しむ月哉　出羽　左琴
国となりきやうて陽炎たきむ月かな　出雲　文遊
両玄は二日とらぬむ月かな　蕉雨
元日の回あの日を忘れけり　まつ紙
元日よ炭売十は指見くし　其角
元日やかけて蔵のものかけり　嵐雪
元日や家に譲りの太刀をさむ　去来
元日や人のよけり人あまた　暁台
元日はるかり草の庵の那　成美
元日やゆるく来の村落し　江戸　山外
元日や起て見ずれば猫　史子

元日やはらはらとして世の花さかし　采更

元日や鬼ひしくもゐさうの人　楳室

元日や若水見るも雲の隙　江戸　千籟

元日やさらに那川の水の音　来山

元日や鐘の上那みてつき　江戸　南枝

元日やどれもおもく山の形　鳥分

元日の雑煮の後も寒けりけせ　百明

元日もおそく家出かけり東　江戸　水狐

元日や大樹のもとの人あまた　白雄

元日やゆるりと出る人通り　江戸　逸月

教ゆひきしき世より春の空　木僊

元朝

元朝や四ツまでうしぬ鳥家　蒼虬

元朝や何となければ遊びつつ　路通

元朝や井戸蓋あける顔の音　紫石

歳旦

年内や家内の礼や星月夜　其角

されどもし扉も年のあしたかれ　一具

立春

春たちて来る九日の雅山か那　きせ线

春たちやとをもし松の翁調　楳堂

はるたちやむかしなからの白い髭　鳳朗

春立てひとの中なる草木かれ　千籟

立春の挿木煙縁の壇主稼　南枝

めでたしや春の月雲のかてうちん　朝陽

初空

初空や鶴をのせたる牛の鞍　嵩室
はつ空に向ふてよその山家かな　素檗
海のうへて初空のよむたより哉　梅室
初空や又山の端に星ひとつ　江戸　助宣
はつ空はわけて関八まれけり　桐雨
初空やまた吹出る風の音　慈光
初空やよこに雲引富士の雲　出雲　芳隣
梅か香を節に立たる初日かな　交寿

初日

松竹や世に誉らるゝ日の初　千代
人生もなき五尺の庵や初日影　蘭更
世を捨し人も起出す初日哉　松兄

初鶏

はつ鶏家蓋なしつまれとや　利北
井の注連の氷ゆるみて初日出　下総　可吟
ものいはぬ肉を向んとす鶏　江戸　小篁
長生の身もまちけりはつ日出　信濃　若人
覚ひとつてもあはれ初日の行　出卯
天の戸に鶏鳴あるし初日影　宋更
はつ鶏や明け旅路よりはつ　可風
はつ鶏やよみ人納る振なく　梅室
初とりや鶏のあさ人ある書もそし　年心
初鶏や水ふる初音のまなこ　江戸　素撲
はつ鶏や寝られぬ故の菜の恩　蕉浦

初鶏

人まれなる深山もやきく鶏　暁臺

我むかしわすれよあるけ初かしは　梅室

暁けれと二羽の声なり初鶏　山外

戸を今の一吹あひてまつ鶏　千路

まつうしに宮へ入りきけり　可明

うへもなき声はいかにや初鶏　甲斐　田鳳

沖鳴りの静まるやまた初鶏　浪華　其山

曲突の火に鶏も居て初かしは　助宣

あけはなる向きて鳥や初かしは　尾張　月居

粉縁して居る声すなし初鶏　加賀　とら令

面白き世となりけり初かしは　下総　角丸

初霞

我庵の松しまぬさきの霞　西鶏

焼けぬ葉家もおなし初霞　濁子

さまゝ物もつみつよ初霞　蓼松

枇杷の葉能植しらなりの霞　斜嶺

あし山先平日の出まてのこる濱　東濱

明春

鶯鳴戸もたれてあけの春　百明

海ちとり山かときくは明の春　完来

鳥もとゝ猫すゝめし明の春　たよ女

今朝春

田をもめくる我青あり明の春　遠州　旦松

誰やらも添ふり付りけさの春　きせ女

萱も屋もめてたくさう也けさの春　貞懐

刀さゝぬ侍もつれだしけさの春　　正秀

けさの春年寄まかれ[illegible]なし　　江戸　祢帰

鍋ふたもことはらしけさの春　　五鞠子　貞山

けふみそる母は乳房をねぶりけり　　暁臺

我宿の戸にも来る也けさの春　　貞室

井の蓋をはらしてあけてやけさの春　　越後　姫山

梅香も炭に香あらしてけさの春　　浪華　柳庵

あさ日出の人をめでしけさの春　　宗固

見あらして世をわたるこそけさの春　　越後　其流

うまれてのまゝ嬉しさや閑加那　　冬松

家業老なき法らんけさの春　　櫟良

御代春　濱までも今日やらんと合ひまつの春　　正式

まさごの中に川ある橋や御代の春　　藤山

尾春　日は東にあてる障子ながめし尾のはる　　尾張　桃鳥

ふくかんともちと遊ぶや庵の春　　月居

あくびしき遊びしきや蕎麦はるの春　　櫻堂

老春　蓬莱の山まつりせん老の春　　蕪村

江戸春　鐘ひとつうれぬ日はなし江戸の春　　其角

花春　誰人ゝ薦着て居ますそれの春　　はせを

侘しくてそれも春哉　　士朗

それの春なんぞ親父に似たるまで　　大江丸

渡る鶴の数やされ乃春　　南枝

初春

柴の戸をたゝく人あけてけさの春　蕉乳

みどり子を膝に抱んとしの春　園女

としの春面白い世を生れけり　釣雪

田作りも味噌の中やとしのはし　素撲

木のもとのちらしも白ちん花の春　越後　千布留

あちこちと居雁の門やけさの春　棠兆

ぬけて出る根太より出るけさの春　成美

としの春のめでたき名也としを賀　越人

初春や我もうきよの子をうらしく　暁臺

としの春や窓の上より日の影　江戸　宜是

としの春八菜売も来ぬ日かりしき　芝友

年始

御慶

御互に済も途中の年始かな　江戸　貞祇

つれ来るは供も丁寧な年始來　武蔵　湖山

喜松と秋の名で来る御慶かな　聖坡

鶴子来し鶴を洗ふて御慶かな　こちら夫

大名やお慶もうけぬ筋を拝　武蔵　松什

柴の戸へ入るも引かせて御慶かな　叢

今年は伊勢と尾張の御慶かな　出雲　惟我

ともかくも来て人の子御慶来　素撲

新春のお慶をみるきたかえ来ず　宗因

松とりて中々けふより御慶かな　筑後　和戎

双方にあたまをの会す御慶かな　筑前　壺天

年礼

年礼やあつまり来たる六十路の坐中　三河　塞馬

二度逢人に見つけらるゝ礼者かな　桐雨

念入て去年の手に入礼者かな　江戸　田英子

草の戸もまはれまはるや初礼者　惟草

年玉

年玉に梅折小野の翁の郷　言水

しらかへの世を出にけり画帳　下総　山馬

年玉やそくばくなれども花のあるり　江戸　古丞

年玉の梨をいくさなる木葉かな　蕉三

とらへやいふも年寄えよしかな　桐堂

初夢

初夢や数ありあるな扇まで　其角

初夢や覚悟して筆さらば　陸奥　一仙

よき夢や濱名の橋の今のさま　越人

初夢や見てひそかにけり寝覚　其山

初夢と見しより梅白の寝ひがり　大貫

見る夢の事のなひて初夢なくり涙　昆支

初夢の念押てまく旅のあと　東渓

初東風

初東風や四海波なき君が治代　宗雅

まつかぜや我外物も武の鞍　亨碑

お載やうきむとのうる東風の吹　涛菴

割掛

載てつぎたく箕の中割かけ　甲斐　重斤

割かけ寄葉ねりの鼻のあれ　其角

年徳神

年くの神をなりかれ油筒　氷固

四方拜
門松

春ぞとも先は聲ようして四方拜　麁六

松のみどり伊勢の家買人か誰　其角

月雪のためにもしるし門の松　去來

いつも松や風も音なしかれ去　手枯

門まつはうてられてあり猿筋　古葉

川ぞひや門松ならぬ人通り　松汁

門松に霰度さはるや夜の雨　氷狐

門松にありくさかりや有明月　武藏　濵吉

吉原は女松立てたるうつり　梅室

男には松ある家は女なりや　柳池

秋入りて雲隠しけり松の内　東濵

輪飾
注連飾
楪
蓬莱
飾臼
掛蓬莱
穗俵
若水

輪かざりの結びあけるや古き納瓶　鼎左

恵方より神も座にまします夜かな　蒼虬

楪や縄も主よ世のむかし　似舟

うしろからまこと神の飾られ　胡及

山葉より裏白もしる竈の部　重五

うら白はたちかへる松の古葉かな　慈光

萬代のためしと松あり飾臼　日向　双鳥

其の門隠者の住家かな　壽潤

穗俵をさがす嵐も家例かな　石鼎

若水や惠の鏡を磨きけり　蒼雲

若水や春の菜をもまつしらせ　碧坡

雑煮

なにはひとあし下きりの雑煮かな　最上　樵月

若水を黄にはくる雲姫の卵　迂鵬

わか水も静かに汲む筧かな　防州　正竹

若水を打かけて出雪のうち見　龍洞

艸まくらわか水むや家の井戸　永光

正月も折りをなりて雑煮の札　蔵雲

紙やうに幽窓つきて雑煮哉　助宣

おもて出て来てかしこ雑煮の札　蒼虬

三椀の雑煮かへてや長者ぶり　蕪村

歯のしらす雑煮の札　伊勢　一蝶

まきらはす雑煮の椀かな　千駱

よ所の中もおまし雑煮の札　柳居

あてくなら汁ものくき雑煮は　素行

雑煮つく家の様にし雑煮哉　梅室

屠蘇

とその酒ありし玉盃の小瓶の札　季吟

ちるほとはつきせぬ屠蘇の長柄かな　一碩

屠蘇の酒とその盃まし来けり　正竹

屠蘇や袖や手よ出て豚からし　千雅

いさけあや屠蘇の気も人は来　蕉雨

蓬莱

ありがたき杖の名をそめて汁ま　杉枝

蓬莱あてる蓬莱の子の掛汁　文左

蓬莱のまね梅の香加ひの卵　如行

太箸

筵のつめのまんなかに立居とつ人は道具 江戸 小村

かた箸といはしるて置内莫かれ 卯七

かくしたるわかれので舞遊なし 小圃

太箸や剝ぬ先の枚移月 篆兆

かくしたるの山か山し白き匂ひ哉 梅令

蓬莱

たえしをとらく思ふ事一つはかれ 梅宝

蓬莱よたゝ千伊勢の錦伊り 丈世伐

かぎらぬの燈人画に嵐う郷 鬼貫

ほうらいの山の空もかき白ひ年 由甕

蓬莱さいしくやさかりけさの鐘 悠之

あからいやまく人宿の野え庭 寂上 吟彭

松のあくあからひかぬ橋座かれ 子絡

蓬莱の杉をつてや菜粮の松 其角

あからの山や持て静し孫のとし 仙台 朱月

蓬莱や朝のかうの取寺より 今 芳河

蓬莱の門ゆう入る山家の郷 蕉雨

ほうらいの奥とのかき時往くかれ 米沢 古巣

蓬らいいつの春や年の秋 越後 蓋琴

あう菜に南寒くとよ子結かれ 一茶

霞横

あかつくと霞横ある夫婦の郷 嵐雪

霞つゝや水草白ひの裾くとの 岱水

ひとつゝや山の匂ひに海の沈 二丘

藪子
螺肴
庭竈
福藁
飾炭
初暦

ふつみやこゝもいそぬおもかけ　小柳

笠つきの一反もの手習子の郎　祖心

江のまや初鰹なりのつき　花洲 新水

ゑぼしみなかたれしかろうし肴　梅間

庭竈さし出し雑炭を焚つけて　其角

福わらや夢さめけり炭しき　千代

操ゝし炭を嗜みしきの炭　東源

斧の柄も朽ちぬ初暦　芝夜

隣へもとぶや山家の初こよみ　江戸 亘桑

初暦きのふのことく成にけり　帐亭

ともかくもおくや初暦　後府 蛍充

書初
寐積
恵方

眼鏡もて財にらしやかきそめ　乙由

大津画の筆はむかしの佛　さゝ浪

手ならふ筆よりもかきそめ初　大梅

出る身ゟ八字の仙の郎　千輅

書初や手の山や筆の一文字　南枝

かき初の鍬をあくなよや硯　芝夜

出る硯の水ありけり　素撲

いねつむや人に語すさき　南々

二日まではなせいねつまんぬかもの　芝夜

傘も蓬莱もうけり恵方松　多芝

恵方のある恵方に　急聞

清澄

人ひとり見ぬうちたり恵方かな　万頂

寛々袴や恵方来り我が家の風　手拾

おさまりや十日の菊の降かしめ　晩山

おさまりて扇あけ好き一日かな　閑更

おさかりや年の伸びて柱りての春　江戸　宗羽

おさまりて繋ぐ軒端の松の緑　千稲

おさへの松やしろへかまへの池水　江戸　蓬窓

おさての中と川ふかよて松しかの窓　枳白

二日

元日なきたのしらむ二日への秋　素梁

三日

残雪といふもおもけさ三日の春　芝泉

餅搗てまたもおさまりや三ケ日　冷朗

馬乗初

木馬てしめ巴山吹引源奴　猿左

弓始

蓄るや射て見んの人了鉄音けり　江戸　逐流

のどらさけ照まてたしめや弓始　三日坊

着衣初

寝すかあかて清らしの錦やきぞ初　宗因

母りての紋めうしやきそはじめ　山芥

松囃子

振袖の見ゆ判子ろ松囃子　鶯満

謡初

松陰ますねかきて謡ぞ先　成英

真の下天地のうたし謡初め　東渓

蔵開

探部や家もおあすくらびらき　一峯

十八をえもかけり花ひらき　南枝

年男

とし男秋手をたかぬひけり　舟泉

水祝

まつ山の房ゆ集れとし男　昌勝
かりやる襟領しとし男　東翠
おのくと大戸明る年とま　千芳富
年をとる歳の[illegible]し酒くさき　小園
うけまむ[illegible]としし男　嵐来
それぞれ女房嫁せむ今祝ひ　其角
[illegible]いきれ門徳坂を此今祝ひ　沽圃
雨衣の袖もしめる今祝ひ　南枝

子日

子日しよ都へ帰ん衣[illegible]の那　大世氏
ひとり摘むまき家の[illegible]初子の日　玄素
先ひとり旅人通る子日の礼　成英
年けを暮しものひして子の日集　貞祇
那須[illegible]と野の子子日の[illegible]　松什
[illegible]おく出先で[illegible]子日[illegible]　小杉
孝[illegible]子子日の遊ひの那　越後 芝蘭
都[illegible]女の[illegible]き子日の那　伊勢 鶯居
迷惑を伴[illegible]成る子日の礼　泥岳
[illegible]舟岬の松よ子日哉よ　白雄

小松曳

[illegible]ひんまれよ千代張ん小松曳　月居
君が代の[illegible]小松曳　江戸 遊[illegible]
引つまて松を[illegible]乱れの礼　其角
雪のけて[illegible]ひの松の[illegible]け　素樸

若菜

ぬかるみの一のまゝしや小松曳　去山　虚白

いさゝかや小松曳跡のつかれ馬　重頼

[illegible]入のいはぬ也けりや小まつ曳　近江　桃下

ふりとの一日さめ也小松曳　阿波　得楼

曳てゆくありけりよく移る小松かれ　紀州　井庄

手をうちの[illegible]稲や小松曳　梅室

那ら山けるとのへと見せる小松原　伊豫　蓋権

小まつ曳入日惜しむて暮りけり　庚年

菖蒲田を十八ちやまつの若菜かれ　[illegible]紙

精出して摘ども見えぬわかな哉　聖[illegible]

老々つむ若菜と人のかしこけれ　士朗

手をうちて翌日節舞やわかな哉　[illegible]上　[illegible]

若菜の秋あとなしとて更なけり　[illegible]表

穀を[illegible]ても若菜[illegible]や[illegible]の露　梅室

眼ざめしまで[illegible]のれ　葛居

畠から[illegible]中[illegible]けりわか菜かり　其角

若菜つむ[illegible]とのやらんさん[illegible]　去来

見て居るもよい[illegible]しやわかな摘　子[illegible]

[illegible]ても[illegible]若菜かれ　[illegible]光

つま[illegible]て[illegible]つけた[illegible]菜への[illegible]　路通

[illegible]てわか菜つむ[illegible]けり　一具

[illegible]中[illegible]わか菜哉　蕉雨

七種

梅の花まだ若菜乃続来る野　万和

若菜つむあとより花も新畠かな　那多

わか菜から…より白し根の哉　五明

若菜ではあれど嬉しむわかなかな　皐郎

七種や明ぬに年のまへうしろ　其角

ふりそでもゝばかり七草わかれけり　乙由

七種や鍋乃紐の序もなし　午村

七種や何為子の為せをする　正竹

七くさや鍋の拍子も去年の[illegible]　挪隣

なつなや籾ひしげけて切まなか　野坡

一年に一度つまるゝなつな哉　千代尼

薺

夕汐の舟にはゆる薺かな　孤屋

とりまわりの白は包える薺かな　其角

烟様や薺ちる…あれかな　嵐雪

板の間に出て…なつなかな　東江戸　若非

あらしてゝ…ほどの薺哉　家上　羽人

打果ぬうちに弾も薺かな　浮荷

つくゝ法門に置くなつなかな　上総　皎雪

水口の…薺かな　其山

…の椀の薺哉　手梧

…しく見るきなつなかな　上総　萬義

…の丁子…なつな哉　一肖

宵の月西に鶯の啼ゐたり　如行

宵月や鶯の戸の明はなし　一具

鶯も外にまぎれなき取のかれ　抱儀

とく起ん鶯や行も若き兎　采更

捨鏡や只ひとりゐの鶯の声　大梅

出かけ其啼く買鶯の声　月居

肩よりも中に摘みたる哉　対山

やらぬ鶯も和紀梅哉　梅室

芹

我ためか鶴はみのこせ芹の衣　はせを

地の底の雪打出し根芹哉　貞室

これきりに径つきたり芹の中　蕪村

芹つみりもの…の篇　芝光

せり摘や蜆ひろふ四ッ辻の庭　イ十八　仏兄

手ぶらける流れ芹の…　小杉

家…鮒の逃し根芹かれ　丈芋

白魚の押分けて根せり哉　山店

又…根芹哉　素則

仏座

仏の座我先摘ていふかしや　祐昌

是なくも…仏の座　梅室

五形

それ…摘せし五形哉　蕪光

蒲翹

…仏…鶯かれ　学朗

松内

…や…松内　梅堂

されたとて我山賀も飾し松の内　貞祇

我段の飾郡也ゆ川の内　江戸　葎一

並ふ軒松を数そまり外内　千轄

恵んての何る松の外や松の内　尾張　完穂

揉手て嵐もなれ庄や川のうち　及島

宵のまもまたるゝ梅や松の内　禾木

少ゐまさる松段の静や松の内　小杉

年寄は寒明るや松のうち　美濃　左橋

松のうち出まきて出も佐翁忌　武蔵　羽人

きいもひらけしきあり松の内　詠帰

松飾て君の旭となりにけり　不角

松過

松飾とりあとや蔵のひらひとの　文逝

飾焚

ひきの焚やしかもぬるゝ嘘猪　芝表

ひきり焚ほとりの薪や舟の窓　東濱

若夷

世の業や豊かにあれと若夷　山律

見るところ出始しや初の夷　下総　幻芝

万歳

万歳や左右にひらきて松の陰　去来

万歳や中まかりて塩入に折戸　柳居

まん歳乃扇を鳴らす門ゆけり　蕉芳

大家や此日過くの御まん歳　一茶

万歳の智恵も剥落松そうし　蓮雨

万歳の盛なり大くたりけり　出羽　潜風

万歳や扇ひらいて揃ひつく　江戸　古祇

万歳の声やまだしく明にける　小團

万歳や伽ともなしの萬國寺　梅宰

万歳や揃ひ袴のうへ鼻ありさん　よし表

万歳と呼ばれぬ先に舟より　鉄充

まんざいや隣の家に籠りけり　江戸　不及

万歳の膳先によりかゝり　一草

万歳やおとゝや門の蒼まへ　社口

万歳よ筒打井戸先すちなの礼　陸奥　蝶二

大黒舞

踊りも大黒舞と見えもせし　至月

鳥追

鳥追のきのふ見ゆる鳥追帽子けり　文通

春駒

春駒やよろこびにかる家の春　古祇

傀儡師

傀儡師傀儡の門戸をまたぐかな　其角

一度見て忘れぬ顔や傀儡師　由揚

傀儡師きのふの森にのりけり　梅宝

咲くまで来て来たり傀儡師　江戸　雪香

手折りぬく梅もぬりけし傀儡師　湖中

猿引

年しや猿に見せるさるの面　まさ試

鞭とつて走り錆し猿まわし　蓼太

はつ秋ん歌くれや猿まわし　江戸　朴家

猿引のようと遊びけり宮の前　桐雨

さるひきのひとまでに鼓打小屋ちかれ　京　梅通

さゝ川に清くんとやむ畫書かれ　たよめ

縣召

ひとり理屈ものぬ影なし縣めし　幕右

初芝居

金平も砕けるなりく初芝居　成美

破魔弓

破魔弓やまたしもなきぬ枕もと　能登　寸長

破魔弓と并しなかし山の家　東明

遊羽子

やア羽子やまつこ意地の姉かあり　利牛

やり羽子にとられそめりの日暮かれ　亀翁

突羽子や花のかけひに夕附日　一貝

突羽子や車拍子をし のゝ人　古祇

羽子つくや振袖かく競まくて　京　古老

突羽子や一つ二つと口乃うち　若人

日永かれくまに突くや羽子の音　常陸　蝶菜

羽子つきのいと若やけり七つ八つ　下総　之桂

人の秋の若羽羽子とりし長湯子　梅宝

羽子板の箱にうけたり春の雪　其角

突羽子や家かゝりして薄の方　三河　流芝

手鞠

汁鍋にまりを投込笑ひかれ　成美

きみやうなる下手の芝とゝる鞠哉　小園

手まりつく袖なりしたる小猫かれ　江戸　文昇

唄につれてつく手まりしの哉　古春

宝引

宝引やゝ子との中に折まじり　紫ゝ氏

宝引や一きりつての新なし　長序　董秋

福引

ふく引やむすひ捨てゝ口切りき　禾木

福のきや人さまくの笑ひ顔　文羿

福引やおもてゝ立ぬ山崩くつるゝ　為よあ

踏歌宴

笛せぬそ耕世なりけり踏歌宴　其角

春下

それさけて首よ尾上の春下し　仝

梅かまへ去年の姿やそこ替ゝし　朴我

鏡餅

鏡もち母屋の柱父遠し　暁臺

吉野よ回りよせそ見ゆる鏡もち　宗固

若餅

若餅や曙光のまゝに搗く音　巴静

若もちやさらそつき色桜のまれ　一茶

福涌

黒小袖焚焼りして福わかし　成美

粥杖

夕朝粥杖や利発な娘の五人打ちかへし　几董

左義長

左義長の十里ほとある夜明かれ　信濃　里人

爆竹

もえ立川ましく打けるとんとかな　桃下

市まちのひけぬまをやとんとかな　尾張　正阿

雨ふりて焚かねかすとんとかれ　江戸　伯遠

まつ畑に都さえてあかるやとんとかな　筑前　和風

綱引

綱引やとりつきかゝし二王門　蒼流

綱引や京の住来のむつましさ　江戸　篁唐

帯振舞

あらせやお帯をしわ筆をつけるし　友静

淸忌

淸忌のつちの時かき京のほとりかな　蕪村

日まさ實月よ神やの忌の達　几董

唐飾

福寿草

きり行の動くもまたし日思のこゑ　標堂

浅草の名ある菓ある唐紙らし　丈左

ふく寿草さしあてらる根もとかな　琴風

一葉まて和朝り移ふく寿草　蒼虬

せむ手に優るも早し福寿草　二丘

さんかうと植るりや福寿草　千貂

ともしうつ見々ても出むや福寿草　出羽　永作

東山も今もまた名ふく寿草　垂天

小一尺世並てあらしふく寿草　虚白

ふく寿草ふもと見て永るかし　梅室

福寿草ひらく和葉のたもとかり　上総　太之

福るしらけて正月人ありかや福寿草　山馬

立ちけるの往来てみんなふく寿草　曰人

思ふさまにまた世話なり福寿草　鉄年

蕗の薹

山きのつり浅ら付て人の縁の邦　嵐雪

押て見る山のかたまや山すゑのつり　耶坡

その枝よやさき庭やり古まのかう　松海

歌あつてまさかあらけり古まての薹　米沢　芦兄

もれ紙下包ひの花しふきかなう　克則

古まとの土のにほひやふきのとう　紀　永年

川際をひきるこりふきの薹　烏友

あつへりの径を出ていり蕗のとう　之桂

若菜
摘菜
下萌

夕日かげさゝぬ所に薺の葉　芝衣
りんりんや鶏の声にも薺のうた　有人
紫にしみ込む程や薺のうた　四明
よしなしや老てもきくも薺のうた　五明
並て居て打もあはぬ薺のうた　下総 以所
川の出の若菜つむ子のあしの跡　乙二
摘とてもまたあけぼのゝ若菜　成美
下もえや咲ちらしたる草のわら　以堂
下萌やよるの川岸のまし　小柯
志ろかねの芽出しはしる薺かれ　木芽
下萌やさゝくしくも野の人　こゝろめ

芽立
若草

慈悲は鳴けて若草の声　識英
芽立や鶏鳴の曉のくま　曉臺
われは今日もみくさ天の園かな　士朗
わか草やむかしの野のさき　其角
若草や柳葉にむかひ行れ　白雄
わか草や月きる新芽出る　巷路
若草や芽たちて見さくり　謝堂
若草やかくや芽立の上草履　和歌山 南畝
若草や桜のあしの下　以筋
志し所や岸の若草いふし　武青
若草に縁たる柳しる　東渥

木芽

背戸の刈しれぬなりしも木芽かな　凡兆
なかんづくハしばみのもゆる木芽哉　露沾
下枝の田へ出て摘ぬ木芽かな　武蔵　羽人
大原は一つにも木乃芽かな　枕流
散るに入てあえりを結ぶ木芽かな　小柳
池水の日ましきにも木芽かな　上総　永保
常の木ふりくるてる木芽の那　護物

草芽

草の芽や久しうてものふるり　江戸　孤月

萌芽

芦の芽ハあされさうて静かなり　下毛　人々

芦角

高波に芦つの先へかくされかな　尚白
川波や泡をやぶるあしの角　猿雖
一節なりのひさけしきや芦の角　茶山

蘗芽

鴨の来て蘆の芽あたりけば　標虚

梅

山里は万才遅し梅の花　はせを
かゝりきや枝のさけめや梅の花　其角
梅一りん一輪ほどのあたゝかさ　嵐雪
こぼれくまさに梅ハ梅の花　野坡
…てて梅の匂ひかな　去来
…の枝の…梅の花　蒼虬
…の梅…明日の那　上総　三吾
梅さくや武士と遊びけり　貞総
見んとする梅ちれ…兎　氷狐

をれてちる二月の梅と成にけり　午心

すれ人の影も見へけり梅の花　下総　古鋼

梅に来てなくや志らぬ鳥の聲　宮上　宇水

雪とけの中から梅のつぼみかな　米沢　蕉翠

垣越に志り合出来る梅の花　常陸　山扇

屋根普請梅見ぬ人に心なし　二丘

ちるまでは咲つゞけたり野の梅　常陸　次隣

梅に客粥の仕かけも笑ひけり　手韜

つやつやと梅ちる枝の夙かな　標堂

梅さくや何か降るとも有ぬ　手代

数々の中の枝にて梅白うし　きき氏

鶯の梅で似合しかく梅の花　錦枝女

とれもこれも梅のほこりに花の見え　一兆

流水をとけつゝもわかれく梅の花　鶸子　外友

ちつちると梅くり白し野の梅　得英

梅の花ちりても様さす手習かね　篤老

うつ国に禅の場あるしらさ　基村

畑中や北風になれて梅のさく　小梅

継房りみとて行遠や蘇の梅　呂川

木々と枝く山家に志る背戸の梅　仙臺　滄々

梅の木戸内から明て貰ひけり　仍遠

梅さきて花ちりつもる也や梅の花　乙白

田楽を二度喰ふ梅の経来かれ　見二
一本の梅にまかりけり野ゆくらず　梅令
折口をみれば桃ともなし梅の花　素樸
咲かゝりして出し梅の花　菫恵
ゆかし咲て湯殿の前を出し梅見　利牛
振せ来て貴はおもしろ梅のあれ　龍吾　雨堂
盗まする白湯呑しや梅の花　伊勢　鶯居
月見の梅には枝を出し梅のもと　出羽　稲洲
漬物の物摘手にも梅の花　吟霰
梅のあれ名の峰より中ひる郷　来山
前川に米とぎあけて梅の花　禾月

此頃や新茶の湯ふりのあれ　梅宝
はなし二月に出し梅の花　一具
中後は梅とおもふれの咲かけて　小圃
共に来てもよふかすして梅の花　一酔
堪忍のありさまかのもと　完穂
ちるもまださかぬ梅の一本かれ　桃渓
引出しに家は様もうかんのもと　億々
ありやうを年をこさる梅の花　朱美
一日は様るかる新しし梅乃花　標堂
あれおもう軒を折でも梅の花　抱儀
梅の花帰除もなしぬかりかれ　朱年

古寺や梅の木かけのうきんの花　葛三
見ゆるまて遠くなりし梅の花　雅文
年の寄ると面白し梅のあれ　一背
人音の月夜に似たる梅見かな　蓼太
夕暮はけしきもなくて梅の月　梅價
裲のすりをかしき葉と梅の花　江戸 斗遠
白紙に書き来たりけり月と梅　蕉雨
立寄るもけやうらん月のうち　吉野 万初
影もあまりあるは字あんの色　万毅
影みれば月も箸にして梅の枝　三河 素竹
よく咲て見あけて梅や梅曽　仝 三岳

畑みちも垣も分れし梅の花　月居
樋の音も出けてまくや梅明り　梅石
手招きの子ひとりでや梅の色　浪華 挑年
人の老梅も年ゝ咲にけり　護物
吹かれ来て山のけむりし梅の花　尾張 鳥津
梅の月うち見て暮れハ松の月　其更
ちとかつ陽子あけるや梅の色　田人
山寺もまるあるや梅の花　尾張 游鷗
梅香に生ひ出ぬや文らくる　素翠
畑の梅孫樹の梅も咲にけり　魯湖
梅が香や何やらのまた川けむり　杜鷲

春あさくまてうめのさかれ　一茶
梅の花とりの気もぬけしさま哉　越人
築庭に鳥も来りけり梅の花　篤老
信心の序とみゆる梅見かな　江戸　太令
床几てる梅見るまなかりし風　麻中
負ぬれはゆるし白し梅の花　万和
山の梅咲くく小笹のさかりくし　花外
根に古の世の中よられ月と梅　圭厚
折ものせぬやまでうめ白し　小園
此梅のふ世なりしもすく咲　皎雪
梅さく月彼あたる本と思ひけり　孤月
釣舟に小寒けきる土手の梅　吟壽
裏道を探りのるりや梅の花　山外
あやさんしく鼻紙買や梅のちり　貞祇
さいりもあけありきりや梅の花　月庵
袖と袖すり合てや梅の匂く　下総　江月
静かさや庵の四隅のうめのちり　士朗
ひる過く咲ぬまあらぬ梅の花　江戸　花晨母
暖いより寒いかうし梅の花　大梅
梅のさくうちに寒さふきそれ　佳五
そく起て見る人の梅のちり　武蔵　杜人
山ひとつ越れは梅のさかりかな　井老

梅の花に皆深山木のまじりけれ　岳輅

粉ぬらす山なとありて梅の花　下毛　楓葉

ちれはとて咲きは梅て句あまし　孔阜

人の梅に見てけりなり梅日々　鳥頂

さめくくと鶯声や梅のちれ　花堯

蘇と田よ四五郎とさつて梅の花　蹄刀

梅花と建って梅を塀ぞけり　山雄

梅とれつかって生する良話　江戸　秀芳

梅香路梅あけて夜に房の来　紙青

隠れ家と来て暮けり梅世話　常陸　健斎

何のてき、ちゑうして梅のちれ　通南

紅梅

梅折って春さしにけり秋の月　文被

紅梅は姫降りするる素戸への郷　杉風

紅梅の日たけわくう汁の赤きけれ　如行

よそくし紅梅一本うめが井　惟芋

紅梅のちりきをかし二日月　徒高

ちる中に鳥紅梅のまろりけれ　湘山

紅梅や今年一入ぬれき雨　朝陽

紅梅の佛ならくまたりけり　成美

紅梅のちれやうるさく鳥かり　雪居

紅梅や照日降りの中二日　呪臺

紅梅や空の井くのありまとへ　雪碎

白梅

外ゝの紅梅さきぬる香の所　月底

紅梅や あるも甲斐なき垣一重　東湛

江戸
白梅や 浮かれて花の前　耕雲妾

春の梅のたけしきをみる明かりかな　士朗

白梅や 錯さまりたる元の秋　石外

川端の春の梅咲くさかりけり　亀六

春の梅の眼よって門や星明り　仝　知雪尼

傘て押してたる柳かな　素紙

五人扶持とりて春たる柳かな　翠坡

いそがしき中に芽を出す柳かな　乙由

柳

曲がるをまげて曲らぬやなぎ哉　其角

世の中の遠入口か柳かな　尚古

痛掛けのあとさきに又見る柳哉　梅室

生れては先筆の軽さなる柳かな　一具

見ても門柳を門に余所にかな　月居

旅人の見てゆく門の柳かな　樗良

陸奥
折しもの柳せて見るや初き哉　英泉

青柳のかかりし寺の荻の門　揚月

平沢
うれしさのとの綾軒のやなぎかな　瑛山

柳見て用なくなりぬ舟の中　倉周

舟まとふ笠投げやれきぬ柳かな　白雲

風のつく方をうしろに柳かな　聖舟

青柳に山鳥のちらちら垂にけり　暁臺

蛙の聲きえて遠や那須野　冥更

そろりくと籠をゆけも柳かな　江戸　白超

出る月は枝ちてきまる人柳かな　仝　樹村

高き人の巣作る柳かな　翠菓

のひるのや帰しやよれ木の枝なし　昇化

青柳の雨のしたる柳かな　謝堂

門ちかくて柳ちる人の月夜かな　保吉

柳ちりて見えておなじき柳かな　悠乀

畑中に柳一本や西近江　山外

青柳の雨や小家なる一ツ口　士朗

泥深く手をふれば柳かな　嵐外

夕月の軒に近よるやなぎかな　浪華　自楽

青柳の大和の國ときけなかな　大江丸

舟様に換れて見ゆやなぎかな　浪華　知風

けふからは笑ふ多き柳かな　手輪

近よれさへしてもぬやなぎかな　伊勢　酒亮

柳には裏の枝ゆれ見へけり　外六

日和よき鯖ひとつありし柳かな　得蕪

たちとまれど川音ひくしやなぎ哉　雲母里　寛暁

朝陽には花の中の柳先みれし　蘭太

青柳やまだ散らぬ市場の柳かな　朝陽

青柳や芝の小草も數はなし　濵芝

眠きほど柳にふれてまゝやさし　可都里

一節もならぬと結ばれや柳かな　月居

よしよしと吹るゝ柳や家ちかみ　近江　世吹

幹よりも長う立てや柳かげ　稲洲

追分の柳馬より濡りけり　古表

雛さまく半の桜て夜の柳かな　羅磨

手放さればらのをやなぎかな　京　瑞池

青柳や梅もそのまゝ炭俵　玉明

本のうけの也やおまたる柳かな　常陸　松軒

人の世の中へ立てて柳かな　浪化

そよりともせぬ柳や蜂のうち　青圃

浜辺よ人いつもやなぎかな　然水

風呂敷の中結ぶ也や躑躅かな　良若

地にしくも届かぬ柳かな　波文

小枝背の手をさへしし柳かな　永年

家あまた見ゆる柳かな　蒼虬

三日月はけふも伸ゆく柳かな　岳輅

いさらしき形振をむすぶ柳かな　荷兮

風の来て水もゆれて柳かな　武蔵　雨郎

鞠場のまは小川屋の柳かな　平山

家ありてまた柳あり中々の　成美

青柳の下や小家のたゝき鉦　禾木
出るものは海やの門の柳かな　若非
常志らぬ社の前のやなぎかな　江戸 とら女
青やぎになれて来む柳かな　巣兆
青柳や四五尺のこゝ雲の井　月居
口もとしき烟のまち柳かな　乙矢
とりかへて笠ともあるや柳かな　昌碧
川筋の曲りやんしとり柳かな　太老
青柳や画にかれて見数　葛三
春鳥柳に青うなりにけり　百池
いつまでも柳は雨の見ゆるなり　槐苑

柳ゝのうらんかえちらしきの家　斎湖
柳まで舟はく舟路便宜かな　蕉光
青柳や循への寺の方の寺　秀碑
三日月の見ゆるかくれ柳かな　伊勢 湛石
波剥ゝ縛ゐけ柳青みけり　一茶
夜り切つてや柳と鬼灰　富木
青柳や網のぬけし網代小屋　之洋人
蔵る雪見ゆるきて柳ゝの寺　湖中
世にありしよく生れかへて柳かな　蕉雨
かけみや柳釣り市の中　卓池
人訓ぬ影や田中にひとつ柳　漫々

剌柳

深山木の中へ入て柳しられ　井眉

さし柳わかきものゝ案内なる　暁臺

忘れてもまた来る也さし柳　双鳥

さしてさへ直に柳と成にけり　之津人

新宅や好のこもりさし柳　紀州　緑芥

何となく小家まはりのさし柳　江戸　玉圃

椿

落さまに我おもしけり花椿　乙成

念入て見る蕾むつましれ　曲翠

野の物のつく落る椿かな　正秀

落さなり笠のせ行椿かな　皎雪

茶摘の来ても掃ぬ椿かな　貞祇

一重とも散らばさせ椿かな　樗堂

一むしろちる日ころ赤椿　玄朱

樋の口の足まで流るゝや落椿　君白

椿落る峰椿まで落る　枝寶

落る餅のあまる椿かな　素明

借の粋して落る椿かな　季碑

八重に付まかしおもしき椿かな　一仙

八つに行く岸や落椿　子格

手ばやく掃くちる椿かな　水狐

築山の余りつかく椿哉　貴修

見えるも綾の堂落椿の椿かな　支考

落椿鈎の傍りに掃よせる　落々

掃ためし土にかたち椿落にけり　野坡

うく椿の冬まで見れし落椿　文鳥

山ちかの竹藪根に落る椿かな　蕪光

常しても落る椿や笠の上　羅虎

雄やまたりくと抛る椿　桂士

気たえて遠寺椿のりおちかな　完来

大川くだれば山の椿かな　波同

月さ出まくら、くらき椿の那　乙二

鯉の背や浮たあるを落る椿　壽潤

うつむけに落散りし椿かな　蕪琴

枝はなれたる雲まだつゞきけり　上総　巻湖

春風にゆかれ椿乃土に落かなす　野坡

谷の松々おちりゆきて出る椿　二柳

落椿此ちょんぼちりおちれし　葛三

花桶に一枝ちりむ椿の那　社口

此れの草もさぞし椿の那　江戸　句兄

雨も晴も梅のうへや那る椿　蘇舟

折く落く落てまた咲椿かな　雪頂

みそれまで奥山椿なりにけり　柳居

後先に月あり夕椿かな　宇石

梅舟は落かりて椿の菊　江戸　仙庵

鶯

あさまても的となりくる居る蝶かな　為中
蔵椽さらりやさうしろ汐ひから　一具
遅鶯ぬくとおあまりて椽の紅　月居
山かけの宮もさまにかゝる椽の声　護物
花椽濱のあらしたよりに鳴く　雨塘
ひとつきれ椽の先ろさまやうそ　梅閣
鶯や柳のうしろ藪の前　はせを
うぐひすの身を逆さまに初音かな　其角
鶯や山毛出て行く雨上り　蒼虬
宇多ひのまたおもひさる小雨の紅　北枝
鶯や木の下の藪を派なり　野坡
鶯のさわとよなくらあしの世　猿雖
うぐひすや一枝過ぎる月夜　一之
鶯や庭掃捨し竹のうち　貞衡
海風と夕日の高きの紅　下総 巌雲
黄鳥や一羽ずつ濱のあさひ和　米沢 古翠
うぐひすやしばし白波にそれ　烏頂
鶯初めを梅のそら人あし　井眉
鶯の枇杷となくなきけり　下総 鶴鶯
鶯飛んで一所に上りけり　可涼
黄鳥や人の家の紅の羽つくろひ　江戸 鶴鉤
鶯やまだ末はしなの子　ゑちご上 桂武

蝶々の舞所やわすれ舟　蕪光

蝶々はほつと息つくあらしかな　花雪

蝶々は人をよくしる宗家哉　阜池

蝶々や乳離をする律義者　篤老

うらゝかの遊びはじめる庵かな　常陸　一南

蝶々は何を見遊ぶや荻の道　珠巣

菜種の虫を喰ふ蝶々なき宿　陸奥　梅丼

蝶々の付き当りけり田の猪　こと女

蝶々の羽ぶしへうつりたりけり　常陸　探畝

蝶々や上る方へと走る花　見二

蝶々の二つ三つあかり土寄りかな　演吉

蝶々は何を待たり来る人かな　之浦人

うれしさや荏原近辺蘇りけり　古来

親けしき時蝶々よ人かけり　紀雪

蝶々や楼に捕へる足のかし　菅河

蝶々の峰をこゝまで宿のやまし　霞山

うかうかと蝶々を踏みけり　出雲　桃瑞

蝶々は荻にいふ名ひ置かれ　常陸　あき太

蝶々や庵に招きて一中来る　江戸　洞天

蝶々や那にも嫁蘇の跡よする　史子

蝶々や身のかくし場を写物　悠子

蝶々は返へ見かけてる草庵かな　月虹

鶯のなくより似る筆のみち　斎洲
鶯なくは橋多き小里の那　葛之
鶯の黒部やとんと春に居る　蘆杠
飛ぶ声て家鶯のほける　遥流
鶯の小修日籠るきけんかな　永裕
鶯や聞きとるゝわく磯の初音　蕉帆
鶯に年とるゝわく飯屋かな　家上　也雉
鶯来てまゐるとて宮とへ遣りけり　利牛
鳴きつゝ初音と鶯の身につくらひ　幻芝
うくひすの群に出る小川砥垣かな　正義
鶯の声に維けり鈍行し　江戸　景文

鶯それ迄きてきれ山家かな　月窓
鶯それちりちりと乾茶の洞の　桂屋
鶯や下駄の笛よく小田の声　丸兆
鶯の声風に流しし作の奥　乙由
鶯や名ハさらして屋ふる門　禾月
鶯やあたりしとあのあの声　鼎左
鶯の声をしてあの北風かな　小松
鶯やよいやと節であるかな　孫来
鶯の緑なるかな傘の中　手略
うくひすや飛くまなく枝の中かな　伯道
日のさして籠の鶯初音かな　江戸　杜有

若草のゆかりひとつや日の光　江戸　蕪少
若草に鋪もて居るあさ日かな　梅室
若草の山案内や児二人　月底
若草や日の当る方の岸の草　月居
若草の汐にまかれし小藪かな　ま表
まゐりと若草見ゆる川辺哉　たよめ
猫の子の若草ふむ雨きけり　一兆
かたひきの糸ゆく見え隠るゝ　成英
若草のまさりて行く萱乃うね　上総　言人
うくひすや若草わけて樹の雫　重香
若草やたゆたふ水のとき晴り　蘿庭
若草の古葉ふまりや猫の中　江戸　くろう
若草やわれとの中の庵かな　可秀
若草の揺るゝかたの露かな　通甫
若草やぬれて居りし羽織かな　越後　二三
若草や出る川の水のまゝ行く　標壺
若草や楝一株の垣となれ　完来
若草や田面より来る見えぬ　乙二
ほつ〳〵と若草遠し岸の松　士朗
若草の都を出て行く木の　多女
りうけく若草根の木末かな　来菜
若草や木の古葉をとめし　蕪芽

蛍子つゝむ袂や馬上の鞍　梅室
蛍や消へたけ也籔の庵り　杷儀
蛍のきけんいつやあさ嵐　暁九
蛍おはれしおとなき郷　続ろ
高麗屋の蛍まじくられけり　上総　永保
蛍や二升五合の籔年貢　由翠
蛍やしらひおりさ川ちゆ中　淀芝
蛍とびや此のきりの草の本原　文艸
蛍まよえ絶あん淀しかと　常月
あけぬのや蛍よまかねつゝ之　一桐
蛍の声ま枕の中きれ　市柳

百千鳥

二里門鼓して鶯なくけり　皈室
挽て見る月の隠るゝ百千鳥　標幸
暖の長くなりてすむちとり　孫六
私養をうらいたまりて百千鳥　東浪

白魚

志ら魚も便あるものみなれ　有試
志ら魚や海苔よる船の置場　其蘭
白魚のひとしきりや波のまみ　子册
志ら魚のちらりけり鳥織の羽　五林
汲出や白魚のあみの底　月庵
志ら魚のしろき時もおぼえし　山舟
遠霧のまぎれ小舟白魚帆なけり　いよ女

水上のさむさも見ゆる川白魚かな　小柿

萩のはしく見えてはなき白魚かな　江戸　杷琴女

百趣の志ら魚きゆるあはれかな　梅室

志ら魚や浮世の事は眼をあき　暁臺

白魚や舟をしはしは舟の端　出雲　李竹

志ら魚や舌寸つゝ流れゆく　尚白

白魚やそれと志る火の流れかな　華太

志ら魚は朧月夜のうみかな　大江丸

白魚のうつゝよみてる網代哉　くち丸

白魚はしるみ跡も浅き江に　東雲

志ら魚のありしとしれて松の影　士朗

蜆

志ら魚の白きも雨のや柳の箸　諷竹

一升ながら拾ふき汲より蜆への都　其角

榛の木に尺はかり来て蜆汁　くち丸

迎ねてさめしこゝろに蜆かな　梅主

闇うちて浅瀬の蜆の蒸　小柿

高尾や賊ある夕に蜆汁　助直

大仏や蜆ある巷の花　白雄

蛤

藪川て蜆かゝる蜆の私　素行

大蛤や口を明きて京の春　梅室

大蛤の閉し二日も取り汁　素川

蛤や貰ひてさうくして来る　信華　槙立

新

養父入

たまくりや大きく見ゆる摂津り　濵吉

我らもよ藪あるものを側より　白雄

藪入の子ながらにふ良きれし　其角

藪入のうらんれとて借花の礼　支考

藪入の宗よくつるや母より舟　武蔵　羽人

藪入と柳子の口より見るめけり　暁臺

藪入やふさんれ銘をとりあけく　士朗

藪入の老ぬをわしく取去られ　西湖

藪入や待まつくる小貝売　南枝

藪入や心まかせの切きさみ　滄々

藪入の来る居て見る夢まけり　佛兄

藪入の大切なりを能も揃の卵　考修

藪入やけりて居る居ねよけり　喜楽

藪入や出去くちやなりまかひとの　五渡

藪入の夢や小豆の煮るうち　蕪村

藪入の振く母子や古櫃　蒼虬

藪入の出して見せ来世ひとの　一南

藪のの池遠くまつかし梶錢　仙臺　其山

藪入の顔しのうちの様ようれ　竹山

藪入のまことものいふ前よる手　三津人

藪入よまつと急けり国遠き　古帳

藪入の二人に生く来てけせ　闌更

藪入やむつまじ口もきかぬなり　来行

藪のかより見とりや小すり坂　浪華 五線

藪入の里の先へ仰して銀杏かれ　秋里

藪入やまくらちなき猫まかり　卓池

藪入の宿を守りけり二月かな　斎岡

海苔

ねころくや歯にあてしのりの砂　左毬

けふや何ことしまる海苔の味　其角

海苔茶を呑すや吹て錦調　乙二

海苔の香や封しもまれ人母の家　菅阿

山ふかく海苔の香のするも哀　梅室

手まつけも噌されけりのり一把　惟学

あるゝ夜も暖き日や海苔のやと　浪華 隣兄

帆柱のうれに干しけり海苔簀かな　助宣

干海苔や何と相ぬく来る雁　日向 五木

横榻にち見かけしつゝ包海苔　外烔

薦く蒙ふきさおりわくや得の海苔　素丸

海雲

和田の海家さうめぬ海雲摘　菊路

海苔草に別出されける海雲かな　大江丸

若和布

若海の底よしよる若布かな　花桂

餘寒

黄昏のきをつかしる餘寒かな　支考

人ひとり来て忘すれ餘寒かな　由誓

梅さく柳よきりしよらんうれ　花外

なきやめて雛子のなく時鶯は　篤老
まつ取しその日の若菜鶯それ　乙由
田の畝も鶯も動く相鶯かな　来菓
川中に澄ぬ鶯のあさけかな　沱岳
日も永き垣まで見ゆる鶯それ　万径
谷の音まで中鶯の法さし　菜山
柴の戸に鉢ちひさきなんそれ　竜村
鶯の何かとり寄しる鶯かな　渚竜
まつ野の畔まるさきまん来　完穂
雨の中先のみてる鶯それ　一具
鶯に出まおけて月秋川　夢兆
川汐の音まであまゆるよらんそれ　京　杜董
我何ともとより居ぬ鶯来　呂川
百姓の馬鳴出るよかんもそれ　吉眠
菜まて戸にて鶯の勝手口　閑窓
棟木尾の鉢柳して庭鶯来　岩見
汐の声く庭や鶯のむし柱　初六

春寒

まつさきまで春の濱辺や高刀乃売　二柳
寒々し見世物出る来　暁臺
花寒前雪まつ一枝あけそれ　路通
きくまた寒し荒林松の汐ぐもり　梅室

冴返

背戸中に冴返りけり豆腐売　丈学

霞

冴返る梢や雪の一下し　江戸　杜貧

冴返る神楽所の寒き巨燵　泥足

冴返る房の羽風や夕月夜　古琢

春なれや名もなき山の朝霞　はせを翁

むつかしと此の梢にも霞けり　杉風

辻堂の春や菜種やあさ霞　鬼貫

一刷毛の霞の末や白帆跡　太祇

日の入りし跡も霞のやまかな　禾月

酔をつんとけれと夕ばえ　山外

通るひと皆負けてる霞の見　梅室

霞けり雲をちらして都小路　小園

枝うつり得るかとみて霞むる　江戸　里女

あくうちのお手本より霞けり　皈堂

海ならぬ国も抱く霞けり　白雄

沼越しに房家霞てけれの入　左示

鴨さける魚つかむや夕かすみ　蕎之

霞むやみんなゆうべ塩を焼きける　素檏

古地の名も遠里小野や朝霞　貞紙

月雲の引かれみの朝霞け　ゑ氏

玉川や霞のきはまさんゆる　孤月

年々を経く吉堂たちけり霞かな　梅室

霞けり枝に都の山かくし　言水

川むかひ峰つゞく霞けり　下総　喜文
ともりけりなやまかする雛霞けりて　撤中
いくらも出る舟の霞けり　柳江
古草のつれてかすむほとりかな　漫々
立待を松さかれの霞けり　寸長
斧うける大樹のはれや霞見え　至良
あき壁のうちまちまとある霞かな　長崎　紫雲
夜の名てあうれさあかり八重霞　乙二
霞田のあつて雨よ鳥のかな　標堂
山の名よ鞍ひのつく名の　下総　子行
田一まい越て霞ぬ豹乃経　悠々
霞けしきあまり霞るをぬかな　月居
唐からや竹四五本の落霞　大貫
八重霞日庭てい宮て椎わかれ　暁臺
辻堂の縁書けある霞かな　下総　巴南
霞まれく来るく人よ喪かな　仝　江月
見えくまで白壁いやし夕霞　越人
面影の一杯まつきてうそかな　百明
ありされし霞よあり鴻芽かな　氷糀
けさくはや垣の冬まて霞けり　升与
うちなる山うし霞かゝりけり　鳥家
よりおもくて木の雁ある霞　白雄

諸白と書く障子まぞ寂けり　湖府

戸さゝぬ東風こそ吹れ家の内　紅々

東風吹や澤桶から汲まで　助叉

東風ふくや鳥の行方さだまりて　枕像

朧月や東風の道して酔ひぬ　名依　都席

春風

灸の点干しかぬる春の風　許六

春風や堤越ゆる牛の声　森山

春風や堤長うして家遠し　蕪村

春風や麦の中行く水の音　木導

礫の身を秋風吹やまうしけり　聖操

春風のきらめく空に吹けり　若非

網を干す出むら一幅や春の風　江戸　蓼静

春風やむら雀のつれ様笠　士朗

春風に馬の古草ひかれ　李冬

晩八の部屋をわくるの風　丸部

春風や吹きまけゝるむき細　怒高

春風や千枚のりしらきの帆　梅室

春風や霞立ち見ゆる山の端し　百暁

春風やちりしかゝる雲雀かな　碧手

春雨の宿家名籠や京の都　宗旦

春風や吹出しての家かなし　白雄

春風や三條の柳原涼見え　恵貫

残雪

ふみへらすの跡やまだらの残る雪　来菜

まさの雪は常にみする白山れ　越人

はるの風冬のきれを吹まはる　夢松

そうそうやわきされらしき扇折　梅宮

九年母と細きにのこる雪の色　春涛

まだ冬や扉にのこる破れ枝　茶叉

春風にのこりて栗の枯葉哉　蝶夢

人の居ぬ家まで残る夕の風　枕磯

残る雪はなの姿を埋めけり　正秀

蘇のけや足軽町に残る雪　加生

ひらくとはつくばや山の雪　乙居

春雪

雪残る我も他国をかかりけり　阿波　古菅

消残る雪も在るままおもうれ　士朗

庭絵に埋れ残るゆき　蕉児

椿也や掃ものこりし雪の色　可真

あさましやちりつつのこれる残る雪　一茶

かき出せば木葉ちる世残るゆき　小柳

のこる雪ゆきにまでなりけり　史今

ふねくの小松に雪の残りけり　旦家

見まわりくとてもちらるゆき　支考

春の雪降るなく枯たし　華古

旅人よ雪を降しまする宿　士記

さくらなりしく花の名も残　小園
名ひとつ置ぬるもとの雪　雁嶺
笹ひり梅木まゐるや春乃雪　蓮芽
まされ雪とときおま出つや　三河 道甫
雁の声まま風やまされゆき　寂上 川長
さけくりり海松の句ひや春の雪　左示
まさのゆきひるのと筆庭　万籟
野の梅さひしやまされゆき　卓池
春の雪ねりひ垣も溶けり　標堂
起てり溶けるをひるの雪　佛兄
起頭春菜つみさまされ雪　士爲

竿漉の裡りきたまるの雪　菜更
あと海の垣静まるのゆき　文擲
梅上の葉中かゝやけるの雪　助宣
まさの雪角ちまた衰けり　一笑
解て地へまとらぬるのゆき　静泉
角ちれの声梅に溶る春の雪　東湖
淡雪やひらひてまさのみ　嵐路
淡雪や菜を梅く舟より　月底
淡雪とうなて道入や戸柳風出　桂裡
淡雪や名一羽まあ庭の松　慈光
淡雪や年を越る壁の草　林宝

淡雪

雪解

淡雪やうつるひまなく鶴のこゑ　千柏
雪とけや数へ出したる石のあと　沾徳
雪解や芭蕉のうへの印乃あと　貞祇
雪解やるへきりて屏ゆ此の旭　芝衣
雪とける山や隈ある朝の月　小柯
あてうる猫もやく軒の雪解かな　江戸　素伯
雪とけやあつくる昔の流れ出る　素撲
雪とけやあめんに煙をひきあり　百明
明の鐘雪解の音や止まりけり　左紙
掃出す木の葉も流る雪解哉　仙台　心阿
雪とけて暮て捨りあをきて　月居
雪とけの風うらふくむり波の上　斗遊
雪とけて山静かなり夕鳥　鉄青
遠里の鶏を呼る雪解かな　義雅
倒れ木の雪を見てあき雪解かな　塞馬

雪間

いつくに境の雪間の雫かな　乙州
柊野く畑とみえて雪間かな　其角
駒帰りと芝生する雪間かな　華白

凍解

凍とけや我つう日のあら籔の花　月底
堤の土も芝生も氷凍とける　宝雪
旅の庵をぬけくものはえ　柳狸
凍解や馬の手くれ先を鳴　流芝

氷解

いさとけや茶売らしに井の中まで　康年

いく網や扇まで剣のあかるさ　蕉光

汲ましで田の氷のうく雫かな　蝶松

とけ仕舞てもうつゝかりの氷かな　陸奥　丁酉

水温

雲水もうつゝをぬるむ田水かな　江戸　柳水

拾ひ先来るともやや水ぬるむ　寸長

浮鳥雁の水もぬるみけり　一茶

研水をぬるませて心すゝむ　葛蓼

あさましや梅に春の山ん　芦意

暖

暖かれ世のなかなるや薮の中　鈞翁

麗

うらゝかな里の出口や屋根の煙　野巣

長閑

のどけさや柳のあちらこちら　小園

長閑さや岩の路のなかまでせん　斗入

長閑なり一つとて嫁乃花　素丸

山の茶も長閑なり持枕　花衣

長閑さの松に見ゆる雉山かな　一学

長閑さや人の行方の竹のとまり　梅令

長閑さや庭をゆくの鳥の音　稲汾

長閑さや田水流てうらの山　其山

佐保姫

佐保姫の袖や筆の流　め流

さほ姫の白き袂をつくれ　成美

佐保姫や見る庭つくる遠山坊　一礎

山笑

佐保姫の雛踊にすそる小袴かれ　菜兆

さしつれて土の紙や山笑ふ　山外

笑ふまいと思ひきものかわすそやすらし　浪華　鶴年

まとうかれ迄の響や笑ふ山　寄之

冬至庵庚年　輯

八雲東溟　校合

二月

聲の梅ゆかしき伊勢の二月哉　尚白

正月を乃屢く暮して二月かな　秋水

そのころの咲あれば思ひ出す二月かな　支考

簑虫の風にふかるゝ二月かな　舎用

月花ともおもはで出る二月哉　波文

鴨居りて我の淋しき二月かな　標堂

おもひつゝね二月の人の端居哉　由誓

思ひたけた人にかりける二月かな　江戸　味舎

衣更着

居風呂へ晴れゆきけり二月かな　越後　杜峯
きさらぎや大黒柱にかんの色　碧衣
如月や物見の下に棲木あり　西月
きさらぎや巨燵の縁を枕もと　嵐雪
きさらぎや入日の庭にさく手毬　士朗
如月や釣瓶にあがる井の小鮒　可長
如月やちらと見えつる扇　蕉児
きさらぎやうすもえ初る山の色　其山
如月や嵐にむすぶ畧の海苔籠　雄淵

二月灸

二日灸すゑられぬ命大事かな　几董
通ひゆく浦も二日やいとまかれ　太橘
餅菓子の用意にけりや二日灸　四明
子らも皆ふまれて二日灸　南枝
借て読む見て居るや二日灸　芦阿
湯も流しあつく屏て二日灸　性学
手遊びの手もいつやら二日灸　枝玉
小まくらにされたりけれ二日灸　その

初午

初午やさんせんよみの芸居らう　其角
またう午や鍵をわすれて戸弄　碧波
うつろ午や其の種蒔のあしたまで　蕪村
初午や狐の出でよる乳母が宿　樗堂
初午やむかしながらの稜桐の波　小柯

初午や枕添つる家の猫　素行

巳のりもる午より出すりけれ　江戸 丕派

初午や麦の若葉のあさみどり　燕諺

はつ午やまろき枝垂の濃くさき　爽則

はつ午や二階障子を市様て　林曹

はつ午や本膳でまはる橋の数　南枝

初午や笠をあしまし丹と岡　山馬

はつ午や梅の鳥うられ川　叢

初午や都もそのまゝ御引橋　手布富

はつ午やあの壁ならん店ひとき　東平

はつ午やけふけふの山屋敷　左明

初午はまた外を語る手ごうら郷　手格

事納

薪能

涅槃

但舟もおよくなるや事納　芝喜

借銭の魚をなむけるかんたちれ　蝶夢

釈迦ん会や皺手合せる珠数の音　其代

本佛を拝終るてより釈迦ん像　許六

高真加不島みかれ釈迦んの日　抱宝

釈迦ん会や参りし人の遠歩行　旬光

只ひとりむかしを拂し釈迦ん像　祖仁

家年とかはれく拝む涅槃かな　二丘

何やらか夕日さしけり釈迦ん像　只丈

歎きの朝がれなり釈迦ん像　季吟

人の道を行てをがむや釈迦ん像　子裕
老僧ハ寝きくひあり涅槃像　乙由
面ないふ人ゐ白しや釈迦ん像　鳥酔
釈迦ん像赤き表具も目まゝき　治圃
鳥ゝ皆なくものならて釈迦んの日　漫々
眉て来く母ありつしけり涅槃像　一髪
拝みみなおちりきすや釈迦ん像　鴻什
足れえみえるにかねて佛かな　士朗
釈迦ん忌のあれハ堅きに花哉　李由
西行忌其望のりをされたあり　鳥酔
白き兎の華わしけり西行忌　小圃

西行忌

心ありて舞ふそらや西行忌　百明
燕餅のふきうちそのや西行忌　李幹

彼岸

雲ゐもの力つひるひかんかな　杉風
行きもんくひかんの夕日人ゝかり　鬼貫
嫁の里hiそく彼岸乃扉かな　貞祇
ぬれくいつ人ゝ寒のつくひかんかな　梅令
是といふ志ありぬひかんかな　万和
宿とりてゆるも佛むひかんかな　一甫
堀なからん寒い扉よひかんかな　蘿庵
乞食の法衣しするひかんかな　吾仲
山里りよいのほの鳴ひかんかな　蒼虬

貝寄風　貝よせや数しくちり桜貝　車庸

朧月　梅の恋やむしき園のおぼろ月　ちせ代

朧ともし松のくろき月夜かれ　其角

おぼろとて十日ありけり松の月　士朗

太秦を夢で戻るや朧月　貞祇

よくせねば破うつりおぼろ月　千梧

渡りても名のある沢やおぼろ月　花樵

おぼろ月眼あてにならぬなりけり　桃年

挑灯で行人ありおぼろ月　文遊

象の声る雉きくおぼろ月　霞川

鶯の夜思し夢とおぼろ月　武陵

夕風や吹あけてもおぼろ月　北枝

きつかりとしてありかゝる朧月　薩摩　山胥

白酒の瓶にわく影やおぼろ月　寄淵

雲の上出おぼろ月夜にかゝりけり　逸淵

洗濯や錦あとのおぼろ月　梅室

身をつめて魚の寄りや朧月　渓斎

おぼろ月小路〳〵の古神楽　百明

渡舟のあかりに浅きおぼろ月　古眠

朧夜

大内の灯はひきもせずおぼろなれ　守三

鉢うつき多ぬ根とかなれハ朧なり　玄来

朧夜や梅かゝく居敷寄おもと　千梧

春月

清水のうへにかゝり出たる春の月　許六

春の月雛子の座を遠き似きゑ　士朗

獅子舞の酒屋を出る春の月　宗讃

縦横の草鞋を軒にかる夜の月　手絡

毛や竹のかけなしの春の月　禾月

戸明れ八田たり見て春の月　之桂

一枚の窓も廣かれたるのつき　梅室

幸れ出て山を伽羅焚し春の月　逸流

かすみの色の象をとかかる春の月　櫻堂

ゝそ豆をかゝる戸口や春の月　山雄

あれくしと風呂うりしや春の月　也雄

竿の戸やなくかくまたさの月　成英

今宵とて浅草川やはるのつき　小柯

大浪に出たうへやたまの月　鳳谷

たるの月降とまつぬくすり哉　一指

いつ見ても永田のうへの春の月　蒼虬

まされぬ本郷のうけそ春の月　万頃

春の月神の門松まさ見ん鉄　雄嶺

にほふとの白むや春の月　左尓

春も十日月に玉子の似かけり　成英

桃垣の菊までうへや春の月　丹波 九華

見ん是まてへまいかり春の月　手布菊

ゆらきらて烟をこし春の月　暁臺

衣近ゆく春の夜明らくなりけり　完来

打渡ようなりさんて春の月　文昇

汲よそゆく春の三日月床しかね　氷狐

家くの戸口にあかるやさくの月　月居

夕頃をおそく出けりさくの月　若人

行方の海苫芝多き月秋され　乙二

門の田路一枚藁てさくの月　蘿居

老らんゝまおるのまし春の月　杜皐

山の端をはなれかねたり春の月　魯町

月夜これいつかゝる事そ春の月　岳輅

春夜

はるの夜は更てくらけれ小挑灯　乙物

はるの夜や隣のうち出笑ひ声　栖山

春の夜や人を以て人の夢　東溟

春の夜や囲炉裏のもの料理屑　有人

はるの夜や麦つまりし声砂子　暁臺

はるの夜は病ぬ者が病ぬ夜くけり　儘堂

はるの夜や友呼出して立咄し　雲母里　一識

春の夜や川へこほりし人ま近　成美

はるの夜はむかしのあはれなりけり地　士朗

春の夜やかのくれゆく人の影　葛三

はるの夜や更ければあけて窓穴　雨堂

春宵

春の夜は誰か初瀬の堂籠り　曽良

折釘に烏帽子かけたり春の宵　蕪村

椽にかけて手をならし春の宵　梅室

起て居るうちの念なし春の宵　濱吉

親子切客ときけんや春の宵　千路

春の宵さはりなき身の持けり　方汀

春の宵こそ歩行てまはりなき　山高

志ゐて居てかりにも出ず春の宵　尾張　鵬居

春の宵筆の咄する咄しの礼　助宣

行燈をそむけく春の宵楽しれ　戦雲

松の木はそれ八風ありて春の宵　方水

鷹化為鳩

鷹化して莊の世なり鳩の声　其成

泊狩

分入りて星を枝折や泊狩　鶴口

鳥帰

さて又帰りの一もん子また雁のれ　杜鷲

帰りて嶺のくや枝の鳥　亭々

鳥交

きのふから池の酒りや鳥交る　藤出

鳥巣

海士が家の穂垣ゆるし鳥さかる　芝長

来る程の鳥またりゆく林かれ　江戸　伸女

鳥の巣を覗いての恥る嵯峨の秋　希因

鳥の巣や人のよこる鳥よりぬとり　百明

あと先に巣ありなくて春の闇　雨塘

春ときまりし鳥の巣入て奥の院　蕉雪

巣立鳥
鷺巣
鶯巣
雛子

木たかみの声に巣立し雀かな　一具
二三日みぬまに巣立し巣鳥の数　綿錦
鷺の巣に見ぬ木はなかりけり　完石
鳥追ふてやむとつゞけり巣鷺かな　惣風
蛇にやとまけて世話し雛子の声　杉代
静まらぬなぞれぬ雛子の調子かな　聖坡
夕されやたまに抱へて雛子のなく　貞祇
きしなくや見つけて山にあそやまず　一菜
きしなくや鳥の時も声れぬ里　外友
声も程ふ川手の雛子の遠音かな　小枝
雛子の麓にあそぶ野の声　梅成
里ちかくて実桜雛し雛子の聲　手稀
野雛子の出ありてわる小坂かな　荒圦
灰小家に山の声や雛子の声　一具
朧影にひしけと雛子の何かな　玄来
山の中なきゝ鹿けなりきしの声　惟鉄
静かさと尾に引けや野のきし　常陸　古綱
傘畳むまでかけの雛子の群　一逕
声かけし雛子に髭ましてやさしかな　辛之
おそろし雛子や小坂を越くかな　南枝
きしなくや旅籠打せる苗の中　千江
前のへく見まもる雛子や麦の中　多よめ

境内に菜畑となり雉子の声　遠濱　蓑人

葉をくゝり出しつくるや雉子の声　佳年

何事のあるとてしきりに雉子の声　涼菟

声ありし筆先ちらりきじの声　悠之

何相も小さゝや松さへきじの声　椿堂

なかなかけれ声る雉子やうしろかけ　百川

人の親の焼野の雉子打れけり　暁臺

一里家に来てなく声や雉子の声　蕉数

雉子追て行くは野守のひとかれ　二三

時ならぬく山一声やよそのきし　桐堂

山里や屋根へ来てなく雉子の声　標良

谷まぎれけりや小山を越る雉子　抱儀

雉子なくや去てくの多能慈かな　可吉里

世の中を何ゝ怖しき雉子の辞　其角

雉子の辞如のゝ住む野にも家けり　鳥醇

黄昏のりんとなりけりきじの声　乙二

吹く風に柳を遅ても声すなし　小園

雉子なくや豊かなれ落ちてさき　蕉光

あさ風や雉子の尾の匂ふなる　眉山

ほろゝとも花に紛れなく拘されん　士朗

虹の根に雉子なく雨のはれまかな　几董

あらはれけりなそゝ雉子の声　蕉夢

燕

盤ま浪を押しもどして乙鳥　支也线

山科を乙鳥もへて帰りけれ　其角

燕のかへりやふところく衣紋坂　南甫

菊まきえだけ此の燕かな　梅室

淀へくだれば乙鳥すかくれけり　完来

乙鳥や小高き波をくゞりぬけ　貞雄

鎌倉の海をもとの乙鳥かな　尚白

つばくらやまるき女のうしろ髪　由嘯

初乙鳥二度めぐりつゝ遠く見　恕什

夕つばめ家まれ望日のあそびかな　一茶

乙鳥や子をとねりの牙の隣かし　含匪

鮮市の生簀あげて乙鳥ゝの那　禾木

乙鳥に巣くはしおけり旅の宿　三津人

隣へもゆきて這入る乙鳥かな　丁酉

つばくらの飛きかけりや町つゞき　左橋

乙鳥や雨に濡れ思ふ羽の艶　南枝

つばくらや夜渡舟にひと川やと　杜皋

大津画ゝ翼ちらしけり乙鳥かな　花村

乙鳥や中をわたれく牛の背　乙由

餌ひろひつゝ嘴にかけく乙鳥の子　素り

乙鳥の巣をまもるや門徒寺　渉路

乙鳥の耳ともみえて海ゝ燕かな　梅室

出かはりに入るの多き乙鳥かな　寸尺

つゝみての簾ぬらして渡りけり　晩臺

わりなしと埃やく門の乙鳥かな　怒誰

新しい世帯見に来る乙鳥の所　出雲 百齡

乙鳥の巣を吹きゆく乙鳥かな　長虹

引舟の綱のたるみや飛つばめ　角丸

接木つむ中を乙鳥の往来かな　士朗

玄鳥や白らんに屋うけ鏡　夢左

海山来ても見なれしや去　寒松

果島

白鳥

白鳥も欸をならべて長閑なり　成芙

鷺

山の井もつきんとするやそこの鷺　秀収

こゝの鷺竹そよぐ山路の松　武之

うそなく降る嵯峨の鷺　月庵

うたかたや動くかなし　春泉

駒鳥

駒鳥の聲のやまぬ青々の松　傘下

春きや駒鳥の聲　琉甫

駒鳥のうひに岩の上　園女

駒鳥の声きゝの秋　岱年

歸雁

帰りくと浅田に歸雁　丈左

かへるの雁なけれ雁をむかひけり　乙二

往かへり同じ雁の雁　あよめ

見くしろまち雁　江戸 丁知

帰雁

まくらし雁とおもへとあはれの那　雅水

帰るとて集る雁よらみのさま　李来

稲無しに行を帰雁のいそきかれ　江化

うくひすと家田に托て帰るかり　梅室

小見なき夜をうらせけり帰る雁　之桂

きりくと相背たしく帰る雁　江華　祇白

更けや雁の名残の眼汁　卓池

帰る雁海より低き夜は入　丈芽

帰る雁声まある夜八なかりけり　通斎

行けの結綬よけゝやむ田の雁　一菜

帰るそしおほく根半のやまめ雁　文学

ゆく雁や今宵よ百隅田川　蘋山

頃礼と打まし行帰雁哉　嵐雪

白雲や皆同し書よ帰るかり　月庵

行雁もさしてめくる扇の那　芝光

来てより去らて見るや帰る雁　誌九

留主の身の拙く立に帰る雁　一具

きらくくと鳥つれて帰る雁　朱拙

帰る雁しのきれなる鉢ありけり　月居

夫くれに戸にもへと帰る雁　成美

帰る雁声まや出よ住舞けり　亭了

雁行て門田も遠くおもはるゝ　蕪村

雲雀

朝のうちや鍬をかついて帰る雲 岱青

原中やとものまつりにかゝる雲雀 た也氏

田中や何むしく口へ舞雲雀 許六

限なく落よつてきん峰雲雀 惟然

我春よりうる雲雀や茎の中 北枝

一吹の風になかるゝ雲雀かな 野路

飛鳥井の君かゝりしやたかく雲雀 湖中

足袋の紐掛へ高うなく雲雀 方汀

星のなき空に一つ雲雀の声 完梓

古る梅のうらにかけてなく雲雀 乙二

仁和寺へ雅貴入るやなく雲雀 月居

行かゝくかゝや一日舞雲雀 京 松秀

おきさ出せる舟の上に雲雀の声 抱儀

なきくくも流るゝ雲雀の形 孫屋

子やましやあかり雲雀の高上り 杉風

西海ととの尺ゆる夕ひばり 成美

雲雀部へ来く霞の人ゝ家霞か 乗月

いさゝかの晴間まあかる雲雀哉 探菜

濱の手をなかれからすり翁雲雀 素樸

竿さすや隅田川なる揚雲雀 南枝

山かけやちきくあれはなく雲雀 芝岳

草の戸や雲雀の足をとゝめたり 漫々

始て来し門川やなく〳〵雲雀　紀口
川舟や雲雀なきたつ右左　采支
爺のかける迄よわ〳〵雲雀かな　鶴居
麦の葉にかんゆる旗やなく雲雀　素蛾
風筋へ行くすてすや啼雲雀　春坡
三日月をうまく〳〵まはる雲雀哉　三千風
野火根にもと築けりなく雲雀　一葉
雲雀野や画くうと啼二人連　素湾
山雀も身かくるなりぬや夕雲雀　百非
又先に眼先へ下りる雲雀の礼　芳英
世戸原や朝とん雲雀あちる雲雀　大梅

親雀

尾をうくて子を呼ぶ外の雀の礼　野菜
数のうち親もまじりて雀の雛　里恭女
飛ぶやこれやなにむかひや親雀　蕪村
子を呼ぶ声の声乃ふくむする　乙二
外はいさ梅もいさむや親雀　一茶

雀子

雀子や明り障子に笹の影　其角
嚏すまじくの出むる雀の子　江戸 旭洲
門口へ庵の雀子かしひけり　堯文
拾ひ時を覚えて来る雀の子　多よ女
菜子の屑なりて親呼雀の那　心阿
親なしの明る障子や雀乃子　小柯

飛行ぬ雁遠ざかりし我のあと　蘿庵
志つかにて我より川原雁の雁かれ　杜有
雁子や生れかはりて古い声　亭了
子雁は宙にかへりし庭への雁　千竹

春鳥

尾に黄葉を付て立けり春の鳥　仙台 峯雪
こゝの鳥梢にまて嶋林への外　標堂
春の鳥みれ袁おちて流れけり　芝表
噂鳥のうへにもかくて春の鳥　井眉

蝶

おきてゐる家ありせんかたなき蝶　をさ紙
猫の子のらんつ好ん流るゝ蝶かれ　其角
酒よされ人にかゝはる小蝶への我　蕪雪
梅かうかたりくて立けり城る蝶　小圃
称むつるゝ人とも我まね揃蝶かれ　鳥竹
待て来す門くわらく古てかれ　蝶之
蝶の来てくわらくいけり庵の蝶　おちえ尼
木々さみの青も花せぬ揃蝶かれ　米浪 朶峰
ぬれつゝ抱て多やみ草の蝶　謙物
蝶飛や横りのくらる鍬つかひ　聖菜
傘をりの暇ゆきてのやゝの朶　重五
返屋からもてゆけ飛揃蝶　寒松
つまかうときかれて蝶ゆ蝶とまる　士朗
掃出しに庭へまてはこなす蝶かれ　廣陸 貞松尼

おくに起てゆけば草の蝶　其山

蝶とまりしくり銭の郷　千梧

飛ちるや染ぬ蝶ある人もれし　午心

かくるくしとまるや蝶の一ツ草　正衍

蝶飛や浮世すゝみかへやうに　一茶

てふてふやいくら菜へしぎの数　白洲

風ふけは羽く足かくさは蝶なれ　古修

釣鐘にとまりてねむる胡蝶かな　蕪村

ちる蝶や玉川の水香に嘉　斗益

蝶飛ぶや風かきわけて足くさりき　暁臺

獣の掃や蝶にわかれし一声に　一兆

雛つくる年寄やくゝ蝶の飛　葛三

花に倦し時もまてよの菜の上　岱元

日ありくと倦て寝ぬる夜すれ　千布嶋

胴もねらひしや蝶の日毎来る　蓑静

入るさ出る垣の蝶の踵けり　素樸

蝶も来る家よ庵にむまれしひ　蕉雨

てふくの来るしや那須の花　月底

てふくや女の足のあとやさき　千代

大和路や草の浦に飛さそふ　杖壺

てふてふし垣結ふ人のゆれ　江戸　大蝦

蝶や来ることしを越して経の草　書外

蜂

来て移し遠くまで行ぬ姑蜂かな　永年

見えながら大川越る蜂の音　江三

まつ手の三番に庵る垣根蜂　里喜女

てふてふもしるく静か庵の猫　伯遠

葉隠れにうきものかは飛月蜂かな　かつ子

ひきさけて蜂の人をも刺けし　山介

飛蜂のうちまぬけや七曲り　葊雄

むつましや生れ替たる足の蜂　一茶

とふてやむつと出て来る白蜂　島似

捨られて蜂の巣かける二王かな　松芳

宙のりや東とあかり蜂のこゑ　百明

虻

釈迦やぬりまつめて蓑へ戻る虻　南甫

蓑ひとつとまた蜂の舎まかな　梅主

揺てゆくもれを静て虻のこゑ　桐雀

虻の眼の何かさとりて不含琵　文考

あのけもまけくかくや虻の足　玉芳

草まくら虻を押へて扇えけり　路通

蛙

乙れ乙やあけぬ隣の宿の声　仙行

宿うしろ蛙すく江の星数　其角

とりつかぬ力でうらの蛙郎　丈芳

田を打ていとも痛ぬ蛙かな　杜杖

しれひとつけくかへて見ぬ蛙かな　月店

地まはりの遠くの水に蛙の聲　野菜

手とあしの揃ふよりなく蛙かな　古紙

松風に濁りて遠き蛙の聲　雲母里 一鳥

山の井に蛙しきけり宵の月　手柏

さらつ蛙見やうと底は流れけり　破雪

かうけん居きれて初蛙　ふ墨

月見れも静かなりなく蛙　蕪左

日の日も夏ある夜もなく蛙　筆村

轎つきにゆけれ雅なく蛙かな　貞紙

人は鐘蛙も鐘に山家かな　士朗

たてかけより流してしなく蛙　葎

鋤しんり新らくやらんなく蛙　三津人

飛ぶる水の音ふきてなく蛙　白人

蘇附白鷺中のえんゆる蛙かな　乞裕

蓮池に生れて常の蛙かな　言水

えんえの蛙なくなり庵の宿　篤老

淋しさもひとしきりなく蛙　蕉雨

川舟に飛ぬへくなく蛙かな　松軒

まつ鳴古葉の下の蛙かな　蒼帆

蛙なく野寺の渡り遠かれ　鉄青

橋わたる人は静かなりかれ　凉葉

松葉のなかに鳴かなく蛙　素明

小雨降宵からしきる蛙　徐来

汐せまる所も濁て蛙の那　素撲

穀の方へ紛て聞く蛙の声　助宣

芥捨て門へ出られぬ川蛙　杜宥

死魚も食ぬ蛙の那　冬碑

樋口にて落して息つく蛙かれ　梅室

田の水の言葉なりあまたなく蛙　吉義

山々けやゆりうごきてなく蛙　重鶴

松風やひとつまかりてなく蛙　職英

さし居り布によりつく蛙かな　藤窓

田一枚水をそそぎしなく蛙　可楚里

居風をうけてさわぐ蛙の那　葉高

小田の蛙なきつくしてや夜もの声　平角

暁をもつらしそうになくのかな　越人

なき出ておのか声々の蛙かれ　様堂

うつくしき松を前にしたる蛙哉　素月

宵に出て思へもとらぬかれ　素可

家居や蛙物言の老をなく　一茶

乾き蛙りの声つれてけり　和哉

遠き汀の流れまてなく蛙かれ　青盛

田螺

景淡く浮脈を移ゆ田螺の那　其角

逃げてみのかの田螺かれ　艶雅

芹の根もふまへて寒き田にし哉　貞祇

ともしける田にしの口の水の泡　櫻堂

なく田にし麦の穂になる秋也けり　小柯

家鴨や田にしの嘴て寂しけれ　藤山

一粒の雨にこぼるゝ田にし哉　習之

帰るさて夫と相まち田にしの声　日向 正阿

苔生て田にしあらはる寺の沼哉　吉丈

鯏もつれてとりし水田螺売　古翠

田にし取る那古の姫のゆくへ哉　白雄

雅も汲ぬ春をおさむ田にし哉　禾菜

あまつめし時ハ行して居る田螺　村麿

一声は十かへり居る田にし哉　禾木

桃さけば桜さけともなく田にし　玉峰

沢と瞳かあかる田にし哉　朱拙

初鮒

春の日まん柳が下の小鮒市　九堂

飯鮹

いくらの子も平からく暑けふ　茶山

飯鮹とひとつまなる和月のいけ　天如

寄居虫

遠む世をのちを尋成寄居虫哉　掬川

身祝ふと志れば誰やら寄居虫哉　櫻堂

地虫

虫おもせ世たしゆるのいけ地虫出　田人

猫恋

猫の妻竈の前おそ通ひけり　杏也

峰鉢して来るかれや猫の恋　去来

猫の恋初手からなくて哀なり　聖坡
五器のふち舐めてもわけぬ男猫か　梅室
伸しより痩るは恋のやつれ猫　小園
一ツ家の猫も浮れる裏畠の花　閑更
垣越して忘れ仏の寺や猫の恋　岩城　洗家
松の文字ありまうくれなし猫の恋　文昇
川端をさそひ行くして行く男猫かな　煕了
足跡を書き畳猫や雪の中　其蘭
恋せぬは猫の心の物くるしき　秋邑
むつましく仏井ともらんで猫の恋　尾張　秀外
恋猫やすりをあらし膳の露かな　庭鐵

実ちりの梅に似ても似るての恋　魚淵
恋猫のほそりしまゝおちぶれ行　暁臺
あちれ来てまたりまきとも猫は恋　探丸
猫の子ともなく成けりむかれ恋　洞大
むら猫しきあまえわかれり猫の恋　魚明
思ひあまり猫も我から嵩朽ちて　大江丸
猫の恋通ひ路のあしあとれば　㯖蛮
浅茅生の浦なくとても猫ある恋　叢乳
あきらめなく晩ほし梅子の恋　左明
春雨をなみきはくもしけて其猫　抱琴
仲く家ってやら眉出れる女猫かな　五明

恋猫のまくねみる首より鈴　助堂
うちかまれ負て帰りけり猫の恋　完来
猫の恋件の御門の都々ふゝき　万和
汐ありく来る戸もあり春の猫　呂安
叱られて簀子にも猫のうかれけり　菁古
恋猫や七尺の塀をとり越　五蕣
雪一枚つもりし屋根や猫の恋　手輪
出かけよひ出ゆや来る孫鹿　康古
ちりぢりに乗ものむれの野鹿哉　白雄

春鹿

孕鹿

小猫のをあつく海ほや孕鹿　慈光
たふとくと雄さられけり孕鹿　大江丸

鹿角落

何の日の風に落して鹿の角　樗雄
落てあさ角まよはれ女鹿かな　蕉更
角落て恥しけなり恭の白　惜多
落るとはいかなるはしゝ鹿の角　由誓
わけや見るやみし鹿の角落て　白雄
あり落しけりや鹿野の鹿乃角　浄雄
あらしまて見ぬ鳥や柏乃角　玄子
角落して安く寝けり男鹿かな　蕉笠
小男鹿よまた試のさん角乃あと　一茶
鍬当とのさまかけて落し角　子輪
抑しく角落さまあまりかな　桐堂

陽炎

陽炎に家肩て川舟子かな　李由

かけろふや望の如なる秋の雨　許六

陽炎やまろく落る岸の土　去芳

陽炎や小笹にあれし家の跡　東之

かけろふやされる動ぬ古世　一甫

かけろふやつかりと落し枯芭　士朗

かけ行や紙肩のつく冊節　茶山

陽炎やまつき菫し土の上　荷兮

かけろふの重くて地に落る柳絮　白雄

かけろふや河原く草く被笠　玄子

陽炎や馬の眼のとろりくと　傘下

かけろふや屋白てまへる草のくく　保吉

かけろふや餓たるものゝ中に麦　乂々

かけろふや筆にまをとつかへる塩　蕪村

かけろふやあのみに見え出る牛　抵治　ちる氏

かけろふや毛のふくてりるやねの庭　祖々

よく掃てかけろふの花の枕哉　梅室

かけろふや奈良へ遠入る庭一羽　千路

かけろふや種き草鞋の履まふ　東湛

糸遊

糸遊や眼よあてらまてはなりき　尚白

糸遊にうくくや去年の古世　乱糸

糸遊やとのもしれと角櫓　白雄

舟の子や経ちる河岸の凧巾　永保

凧巾の付しは淋しき松の枝かな　士朗

風のふく春のあしたや凧巾　梢山

ふる里は凧巾ふしや目につけて我き兎　梅室

めし時は子らを呼けり凧巾　乙二

綱日の沼先達しいかのぼり　棕郎

凧巾出るや伸る浮くの猿られし　杜蕤

凧巾の尾にもつれてちる小笹かな　其山

あれ残して梅子や凧巾を挽え　茶静

手はなして子の家に入けり凧巾　濱吉

日ぬるまま黒く出られし凧巾　一具

春雨のみたれくて静なり　菜叟

初雷

初雷ころ樹つ里とゆるし　子井

とつ雷やわきわく梅のさと　千路

初雷や却ふる月夜の古ひより　五葎

初虹

まつ虹や退屈なしに舟の中　蕉窓

初虹は菜の花芽と移るなる　星僊

凧巾

木の枝に移しかゝや凧巾　嵐堂

市中や馬にかけりし凧巾　涼葵

いかのぼり志れ心を吹せてり　鳥酔

凧巾ふくれて上りて城下まで　宜来

柳くゞるなりつる杉の様凧巾　暁台

ふけりくと花に破れし凡巾　千代

凡巾鳴や裏ハ出来ぬ只相ハ　露白

家建て新羅も子あらそひの空　布席

日は付て八十しき里の凡巾の数　李表

きんくは長男も出す凡巾　杜徐

美しき凡巾あげけり乞食小屋　一茶

切れきて来た人まつ凡巾や凡巾　江三

好もしく凡巾大きに垣を越せ免　桃塢

切凡巾を鳶に付けり柳原　素樸

白川の華に見えきいかのぼり　其角

かゝり凡巾松の数見てかられけり　里英女

みゝ角も出てかゝりかゝる凡巾　筑前　宗逸

好もしく丈凡巾の尾砂にまかれ居　近江　石鼓

凡巾の糸かまくて長き岬かれ　雲里

山から家居見て持ていか揚て　こよ女

切凡巾中落て名残に尾をまかる　北古

切凡巾や満てよりも縄の果　桂裡

引けく見るとは平凡巾　也雉

凡巾の唐居あたりにかゝりけり　枝月

出代

出代りや中を見れ只魂あられ　岱雪

華居や出代る夜ゝの物淋し　千朶

出代りや高きれまゝめ昔加治　許六

出代りの葛飾ぼしけり舟の内　武蔵　雉年

出代りの馬にものいふわかれ哉　不明

出代りの一日よせまうくとかな　白雄

出代りや猫にも見へぬあれかな　李由

出代りや框まあきねる萩の汁　亀翁

出代りて煙草もちけり老が膝　常陸　夜慕

出代りや只一人ぬれし田舎道　南枝

出代りや絵仕事またしまひ　許六

出代りや甚さあしくと古葛籠　蕪村

出代りや君が出田の手大切　暁台

焼野

冬のけ焼野の隈や風の末　猿雅

寄かしく親なきの若く焼野かな　湛然

山焼

先雲よふる降出る焼野哉　蕪村

中くに焼くやけの毛蔵哉　百明

おしさま人にけりる山をやく　之気

山焼のうつりてしるや摘ね網　史子

風呂の中よれて山やく咲け哉　楓葉

やく山の名と風呂焚て焼手打　和我

山やけてる昨ふてきる一ツ鹿　白雄

山焼の引こ火と焚こさら那　松什

やま焼や十二階の寺の梅ちる　東翠

山焼き夜のけさ子寄る庵かな　蕭居

山焼や夜は山越しのともり哉　月居
山焼の火に驚くや海の宿　蕉苑
やく山の煙りかくれぬ暮の月　朝所

畑打

うとくとも見えて畑うつ麓哉　去来
畑打の目はなれてやすきけんなれ　佳年
まさく打の肩くらべけり春の海　常陸 孤采
打かけて休む日のなき畠の畔　駝岳
畑打ちく鍬きられしと歩行かな　臧英
畑打や家々もえて暮るる　蕪村
まさく打の尻つき寒き日暮哉　蒼虬
畑打によい日和当なり山の堂　宗阿
畑打の去ししものやうしの穴　汝皇
寺のさくら打ち残せと姥まけり　尾張 黄山
畑打や遠くのこされ肩の像　壽汐

田打

新法治の田を打夕日哉　貝角
稲の度々返す田打かな　田鶴
二度へわりく休む田打この夜　大業
鶺鴒の正月過ぎて田うちけり　蒼之
背打の小田のあら起し　意程

苗代

苗代やられし白煙　許六
苗代や二三日のやれ足跡　野坡
苗代や坂とりまく人のうけ　素亮

苗代をうらんて居る森の烏かな　太芥

林の鼻に苗代水や岨あらし　尚白

苗代や一軒退て家の前　梅間

泥亀や苗代水を踏つらむ　史邦

苗代や家を居て峠屋の檐　一甫

苗代へ白鳥来るや家の栞　素樸

苗代に滞なく落る里の那　古声

苗代やひと川に来む稲瓏稲　蘿庭

苗代や隣ちかつく朝乃月　青坡

苗代や要もけれは流れてよく　升窓

苗代は原く二枚の山田の那　之桂

舞鶴やて寒さかへて種下し　其蘭

種下

古川の流を引つゝ種下し　蕪村

めつらしきの音まゝゆや種下し　秀存

種ひりてさしくりけり種下し　乃美

種蔚

種蔚して神まつりや鯛汁　尚白

鼻高きや鳥追ふて種まく　江戸　如柳

けふきさの種をまかせけり小笊　宜之

水口祭

桜花ちりぬ早苗の風祭り　乙二

種芋

種芋や村のさりをとうも歩行　太衣

種芋や十府の菅菰並あり　傘下

獨活

雪間より薄紫のうどの芽かな　去来

蕨

せゝらぎも出る蕨やけふも絶間哉　嵐雪

うしろの音や跡から続く山路見　白雄

物背の蕨さえてくわしひかり　嵐雪

つくづくと浣ひ手まき蕨の手　由之

目は筆なつかしや見しひとむ　維駒

ふき出し上手や蕨の丈くらし　百明

摘くしたものを曲りわらひ　丈草

ひと日つゝあしの見ゆる蕨の郷　竹意

一尺のわらひの芽や松うしろ　佳流

早蕨や皆ら植し松の下　浣桑

小松野の蕨萌出るけしき山やさきより見あたらぬ哉　几董

土筆

筆はつんとかくや蕨の拳かな　葛三

宵の雨知るや土筆の丈揃ひ　助宜

見あたらぬもののくらきあらぬ土筆　沾車

さらしくとも我は花や土筆　貞祇

まだ白き出しつき出し土筆かな　其角

土手まで雨の[illegible]土筆　元志

来るやそれの草むらおしく土筆　石鼓

須磨まで摘し来りて土筆　川長

甲斐
抱もとき子の尻あてや土筆　欽哉

川舟やはるかの人摘つくし　篤老

冬文

杉菜　嫁菜　胡葱

摘ぬ手て出しまするまる土筆かな　雅陸

土筆や摘まれ生へてつくつくし　墻卓

摘まれてつくつくし土筆を袴かれ　千粒

手押のことくに粒つまき土筆かな　家上　素鹿

土筆舟峰すそ摘むかな　洗斎

苗松のひとつ生る杉菜哉　巣兆

浅芽生の人の衰え嫁菜かな　東始

わかれ気やあさつき鰭浦小網　牧笛

あさつきや汁茶碗　史邦

胡葱や土器黄の色むしろ　貞祇

去りて胡葱むさくよしや　芝兵

虎杖　五加木　春草

いたとりをすすめて千人の群　乙二

いたとりの煙りまちけり仙の家　蒼虬

いたとりや休むは家のかけがは　楽高

藜よりいたとりともに苗の数　鴻蕪

芦とともに五加木を庵の垣根かな　扇雷

さしつけて摘むは五加木かな　岐水

みつわりと謡の声は春の草　士朗

さき草のまつあれ日数かな　晩臺

はるのくさりむしの春の草　梅義

古はりしん春の草　芝兵

よきさの春の草　二之

蒲公英

鶺鴒のふんで行あり春の草　完稜
あらしのあとに出て来たり七草の草　寒松
子を抱く人の摘けり鼓草かれ　松海
山吹に見したんぽぽの小金原　梅室
たんぽぽや雨にぬれたる[illegible]　百明
たんぽぽや一筋[illegible]　乙二
たんぽぽや菜の[illegible]蝶の[illegible]　蒼虬
[illegible]　善松
[illegible]の[illegible]　聖菓
たんぽぽより静なる[illegible]　午心

薊

[illegible]　文考
[illegible]の鬼あざみ　蒼着
蝶の来て[illegible]薊かな　丈左

苣

苣の白[illegible]　三津人
きさらぎの[illegible]苣畑　春鴬
[illegible]苣[illegible]　蒼光

菜花

菜の花の中に城あり郡山　其角
なの花や戸口[illegible]　蓼雪
菜の花や小家より[illegible]　史邦
菜の花[illegible]小松原　東之
菜の花[illegible]　貞[illegible]
菜の花の白[illegible]　葉也

古畑の菜のこほれ咲娘の花　樗堂
菜の花は大名とおる替かれ　士朗
なの花やいつまてまても麦の春　佳年
菜のはなや霞みかゝる山家かな　成美
菜の花や鹿の溜る空居井戸　爽則
なのはなや月は東に日は西に　蕪村
菜の花の世界にけふも入日かな　淡々
菜の花やらねは暮て一休　也雅
菜のはなやわり松菜の出来ぬ所まて　長虹
菜の花乃座敷の精る日かな　傘下
なのはなやむかしの中しくれ　桃年
菜の花や雨の中くらし一里　小杉
菜の花や蕗にいそきてひと盛　岑居
菜のさかりや畑のきはの塀の立　素樸
菜の花や松杉出たる寺の犬　洗我
菜の花やかくれしまふて飛ふ蝶　伯遠
菜の花にかくれかねてや出る里の犬　可厚
菜のかれの花まれ袖をさしはさむ　史幸
菜の花やこゝらも畑の暮盤刻　蓮陽
菜の畑やとちやらむしくて蝶ひ鳴　月底
菜の花や蒲さへかくしてさめ　士朗
菜の花や屋根の雀の鳴　梅室

大根花

菜のさやいふとてまきけりの雪　李外

菜の花や市かくの人通り　稚嶺

ふるふるも雁鳴く大根　乃龍

売られて大根はしらぬ花盛り　成美

歌一首村からあし花大根　文角

五百草

人はしらぬかりしき五百色の茎　梅盧

山葵

手拭をとれも女そ山葵売　習之

哉言ふて書成しつる山葵哉　仙台　無高

さらに辛きらちお持てる山葵身　貞紙

岩の下ぬれて味ある山葵かな　氷私

鳥芋

泥つきしくいけし鳥芋八百の王　乙二

桜苗

雅なるを今年二葉のさくら苗　芝津人

菊苗

佛の手わけて植けり菊の苗　徐月

傘もちて席よりぬきての苗　南畝

納まりの残つや菊乃苗取替　佳鳥

日記にも見出してまりぬ菊の苗　其秀

二日まで菊植ゑにけり菊の苗　乙良

刺木

付くるく見のぬきろんてましし木なれ　舟泉

手心の宿れといくぬきし木ならば　燦巣

一しほくりて降出けり小ぬか雨　雪鷗

二葉出てたしかほく刺木かな　ささ気

接木

見てもとの芯の葉して接木哉　嵐雪

接木してまれ程多くなる免　米美
見物の腰かけ多く接木かな　鼎左
接木屋の箕もこんで接木葉　芳永
接木まつ人よりさきに咲く免　梧鳳
自得して接く接木の枝もり哉　蕉光
接穂して雲の末や小溝筆　蝶菓
枝々へ入まゝ出して盛接穂哉　一茶
柳しげり切く接木を志てる免　永年
寂もの園ひも原て接木かな　蘿風
垣越しさうの打ちる接木哉　菊村
錆て居て親の口まく接穂かな　翠葉
峰接や館て出る木のいそぎ　貞山
為そけの手元まぎらし接木哉　青雨
山際や接木まつりも一さかり　万以
接木して出かたもしめる論かな　井左
接木から都へ出る世渡かな　信濃　圭帰
我年も算のつく老の接木かな　和哉
少しても気に入る年の接木かな　桑花
津通りや接木の屑をふみさし　蒼帆
籬のの子笑みて接穂かな　四明
遠くから買ひ集る接穂かな　貝之
春風の寒さ度よして接穂哉　素盛

松花

霞より出て来て染けり松の花　斎瀾

池の尾や名のみなされし松乃花　古識

雪年のおもしてあるや松乃花　松什

松乃花ちるや年ほつく麦不袖　角上女

足音のよる年ばかり松の花　湖陽

松の花ちるや斎叢浪の花　宜来

芳川の花柳の花さきまとふ　白雄

松の花月さへ古うおもす秋で　麻文

松の花屋根をぬけ出て青葉より　寥松

二月まで夢の女年や松乃花　碓嶺

初桜

見みたる桜の中よりまつ桜　未代

見るたびおりしやまや川桜　乙州

鳥あまして口よかしけも初ざくら　鬼貫

香気のうらし嗅まよまつざくら　貞祇

見る人のいふこるやまつざくら　由之

みるを鋼待くあり初さくら　子猫

堂の枝抜のをさけや川桜　出雲 誇丸

翁出て朝山ありて初ざくら　寥松

めづらしの蕾せまや初ざくら　一笑

挿されたり人のままつみる初桜　梅室

肩の木数わとなりけりまち桜　角上女

背見送や鐘よ移る初ざくら　其角

初花

人寿の延きはまりなき桜　月雄

けさ見るや夢に笑し初桜　標堂

只庵に心て来たるさくら　千代

つまれしといはぬまゝの桜　葛三

おそきまで齢しけり初さくら　林曹

往く人のよき家多しまつ桜　康年

初花やあけぼのちかき鶏の上　浪華 其翠

まつ花を枯かと思ふ桜かな　素樸

初花のさき待人まれなりける　支旡

初雪や待つ程おもふ集人　文誕

まつもの二日ふるくひとつ咲　外六

待花

初花や年よるこゝにうつく桜　寒松

まつほどは心もとなくなりけりな　花外

おもふ中に暗さゆく山の雲　通甫

蘆葉まちわびる言の伴なれ　由之

彼岸桜

ひとへ咲彼岸の桜折くれけり　卓郎

鶯のひとなきさくらかなりけり　調雅

糸桜

さくのしま心あり糸さくら　嵐外

静まれるもの糸さくら　鼎左

冬至庵庚年 輯
八雲東溟 校合

三月

三月や清水もちる瀧まつりて　信徳

三月や唐土の人何として　幾哉

三月やおもしろしても鳴雲雀　大梅

弥生

神風の弥生は古し一門の作　蒼雪

羅塀に葉の色見する弥生哉　百明

旅寐日数のいくさまに弥生かな　永年

馬士の咎もやさしき弥生哉　貞祇

まだ今かわく〳〵椿忘れる弥生かな　卓池

上巳

桃の日やむかし笑ふも猫の声 芭蕉
蟹の目やちよりの花を抱かけて 葛三
みかけは里まで桃の節句かな 梅室
出かはりや蓬に鯉をながしけり 寥松
出かはりの路のかどまでありけり 午心
出かはりや茶杓なしの茶巾かな 其角

曲水

曲水や扇の先に盃のつゝ 小園
出かはりもなんぞ春さめや小里の花 千那当

雛

うつくしき神のまゝ袖の雛 其角
原女の雛うしつくて哀なり 嵐雪
振舞や下座になほる去年の雛 去来
箱を出る貌わすれめや雛二対 蕪村
きのふまで笑ふくれる雛かな 千代
錦着て遠ふ雛のまゝ子 闌更
初子はつくりたてや雛の櫛 貞祇
雛かざる足居の下まで川ながれ 小園
米をつくともあるて雛の宿 蒼虬
まつとれて手ほどくと立雛 梅室
ふたつひく前雛は無心かな 万頃
白きりに見ゆる枕の雛の郷 仙台 大阿
むづかしき献立なし雛の膳 下総 雪修
見る子も来る子も雛の膳かな 士朗

伊勢のもとて雛の小町ゝの秋　可友里

白けやさらにあかる雛のくの汁　深舎

ものこゝろの比経いて雛かざりけり　橋堂

蓋とれハきらりと雛乃袂ゝの那　松下

錦変へ並ぶ雛おもてる童の形　文遊

梅花やともみとはこゝや雛の出　芹舎

ひとりてある紅葉あり脇の雛　完来

雛の様は雛つゝ遊ぶる侍ゝの那　杜有

好くと雛り抱きし子らさゝれ　和我

雛たて子ともかりや演衣　一具

雛棚の主借にゆくくあゝの那　梵南

帋雛

雛の出は浅茅くまくさやらひ形　漫々

酔きえや木のくのぬぐる雛の良　暁臺

市にも雛さしやくまくて並ひけり　林曹

並ひの下の訳の議ての雛ゝの那　東滇

松葉焚く煙りにそまる雛来　大梅

雛棚や形は子をまる了巻く　抱儀

盃了給きてかしゝ小雛ゝの秋　雨塘

紙雛にあまさく人めるとやひそれ　白雄

帋雛と花見ゆる鳥くまかけり　成美

帋雛の勢あまらかしけるきし居　梅室

紙雛や下作の国生の人の家　左明

桃酒

親も子も同じ呑人や桃の酒　傘下

草餅

舟肩に女かりけり草の餅　蓼太

蓬ほと深く染つらん草の餅　嵐雪

草餅やけふは座敷も野の匂ひ　程盤

草餅や足利染のうけふくさ　一具

草餅の匂ひ移るや少女か袂　李下

鶏合

順礼に鉾まで挑むや鶏合　其角

勝まけはいつもたのしき鶏合　挙白

主人やあらそひかかる負け鶏合　尚白

三合もして止め負し鶏合　五明

踏付し砂はいつくや雞合　若非

寒食

寒食や砂にまろへる松葉　寒松

寒食や物屋より火を焚初む　挙白

寒食や火を付けぬ手をもてあまし　琴風

寒食や焜爐さへなく眉引く人　半心

汐干

其卿の汐に思ひて汐干かな　大江丸

ひろく帆の浅瀬狭まる汐干舟　去来

屋かたの嵐吹て汐干狩　百明

かけ濱は親よし浦の汐干行　越人

人去りし船をさへる汐干かな　一茶

草履まで筥屋に来る汐干哉　貞徳

焚出す家多く這入汐干かな　禾月

よく干たり露て忘れぬ海の果　抱儀

松の声けふの汐干も事あたらし　蒼虬

汐干人と出るの豆の継ぎ生　布席

うれしさに松が緑見て汐干かれ　諷井

松はりのはりて汐干の広りかな　素樸

もう月影穂さ見ゆれ汐干がな　南枝

吹蔵に名残おしけりな汐干貝　菜静

よお人なし幼年て竹る汐干かれ　仝

芳さる支度あかり汐干時　里人

猫もらし山あまて人の汐干かれ　成美

人からひとを服箇にきむ汐干かれ　菁兄

戦の益を手尺出る汐干への郷　浪華　松浦

神垣に風の吹汐干の郷　梅室

ふりかへる女あらば汐干かれ　草右

麦畑に汐よる汐干かな　石川

奈良祭

やまひのむしよりも松あたりて　暁壺

奈良をさきのよ日く二日ほど　祇来

壬生念仏

墨染のうしろ姿や壬生念仏　古祇

寒念仏けふは壬生念仏　蒼気

ちる花の回向にあるる壬生念仏　菜之

御身拭

深山かうの肩ぬくやみ身拭　几董

峯入

峯入の布かふさでしか　昌碧

永日

峯入や鎗しめつけるほらの口　玉芳

よそ人も寄る草鞋の旅ゆかれ　宗固

永き日や油ノ木のよわりけり　聖應

永き日や是のよそさまで暮れなく　青久

家根ふしの帆柱見ても日の長き　伯遠

前茂の海見くく永き日也けり　年心

永き日や子に巡りくその芝　丁知

芝の木に節立けしり永き哉　成美

永き日を樵まで打ふし野の松　青人

永き日と身のかさねけり藤田浦　雁年

椎樫を雨のくもりや永かれ　

永き日や大佛殿の普請まで　李由

永き日をかねけり三百数年　去琉

永き日や雀の親のあまく事　尚白

寺門の松植ゆく日永かな　文辺

永き日や暮帯のあれこ桑名老　百明

寄年の萌芽なし日を永し　一瓢

梅の都へ降出ての日永のれ　在京上　作宗

梅なまなむ春の雪えても永し　林間

鯛釣りし人語そろぬり永かれ　鳥執雄

永き日や鐘つく跡で暮なり　卜枝

ふるく暮く池辺の永日かな　而后

針筥の鋲てうつ霞かな　南甫
桜鯛りはやきよの川淋しれ　夢古
伊勢桶に松の影搖く春の宿　梢山
永き日くいのちに余る飯支度　康年

遅日

鶯も山さきりなりひろうた人の手にも　天池
海を行きてもくらし春の遅き　素外
棹挽と出ん舎せや春遅き　寸馬

春日

もろありや優しき能見松　寒松
春の日はさえ歩けも暮れにけり　成美
ひろまちを一ツ返してよき暮り会　戦雲
こゝろの日や刀あつかう原やしき　白雄
人見えて桂様への春日かな　得蕪
あつしき足あく遅き春日かな　松軒
把て手よ出を縫せる春日かな　白桂
打寄て海本を移し春日かな　暁臺
春の夕や縫り来る山路かな　闌更
蔵塚よ見て光る春日かな　静加

春宵

盗人の声す舞けむ春の宵　闌更
弁も行事を訪えけり春の宵　蓋光

春夕

釈の日をとまれ来て春の夕　一髭
行春のまだしかんとひろ寒く　蕪村
うかしきに聞きえれし春の夕　一映

爐塞

爐塞や十月ちかきのわすれ　完来

炉塞ぐ二日越ぬるこの卯　蕉太

爐塞のひさ留しけり窓のかく　玉園

茶摘

山畑の茶摘をうきん人多かりの卯　重五

おもかりたくなく殊に茶摘かれ　玉芳

扉あれしかりなるらん茶摘哉　古城

物々場て節の宿の茶摘かな　野文

つむうちに白のかをりし茶園哉　祖口

山畑や打ちあひまして茶つみうた　南画

紫舟の宿摘くある茶摘かな　旅前　仙洲

手つみひとし息をけむ茶つみかれ　素化

八つなかや佳人のしもの茶つみうた　下総　米甫

桑摘

摘人乃足にてゆる桑摘かな　永孤

紫舟乃里見て桑摘のおけかな　其角

桑摘の留るし白髪乃揮除かれ　天外

桑摘やさしてかへりけり老夫婦　鶯居

屋根なる人も古代のかをりこの卯

蚕

いまとのよおやかりやときに蚕かれ　芳良

まくらし大きれ家は蚕かな　尚白

二つ三つ文箱のうへし蚕この卯　波圭

きのふの居酒はむき蚕この松　志仙

松風や秋の蚕のうへかねし　古城

之佳人

山桜

白魚に桜しらする盛かな　丈左
草履の底打てはらん山さくら　き丸
小坊主や桜まくられく山さくら　甚角
山さくら話をきく八坂上りし　尚白
見ぬ人へ声を尽しの日暮のや山桜　来山
一朶のみてかゝまて也まさくら　貞山
いさ神て入中見ゑん山さくら　一鉄
山さくら世をむつましき枝木かれ　猿雉
いひ甲斐もなく芽吹くや山桜　花外
きのふけふてう桜の梢のはけり　無村
牛馬の骨打兄ゆれやまさくら　樗堂
里のある方へかゝるや山さくら　回人
日暮るゝや打り抱也山さくら　梅雲
山さくらちるや小川の糸車　智月
谷のをいとの背戸なり山桜　希因
きくの中もとれ見ま海老山さくら　楳堂
是も身の宝なりけりや山さくら　士朗
山おさくら桜さ山のかゝりてれ　可老里
家あり夕山さくら火乃あかき　蓼更
とらさうと見をおけりやまさくら　斗入
知らぬ人のおもて見やり山さくら　平心
よし野しらてさきもせきて桜笠　きせ我

桜

さくら狩きどくや日々に五里六里　はせを

明星やさくらさだめぬ山かづら　其角

咲先に見し枝なかりん数さくら　丈草

雲となりさくらとなりて去年それ　小圃

あきさとしまき村松のさくらかな　暁雪

世の中は三日見ぬまにさくらかな　蓼太

家路をなく見しさくらの木の間哉　士朗

大木戸の花咲人来てさくらかな　寸長

庭外のさくらに咲て鍬り哉　茶浮　如松

錦とれし野の鶯もさくらかな　撫月

野の花に鹿の寝る桜かな　伊勢　鶯之

人去て淋しみしてちるさくら　梅宝

盡ぬなく枝の花さくらかな　越後　蕉光

蝶もくれ山桜を一重さくらかな　暁山

桜のよる涯屋きらめてさくらかな　其角

をしむことなし桜ちりけり　一兆

屋形舟上野のさくら咲きにけり　杉風

あきらめて手折りけり花桜かな　李則

野の桜折られる人はなかりけり　杜甫

あんのりとさくら咲けり隅田川　枝玉

隠れ家のさくら遥かに見えにけり　洗斎

さくら狩海と山とに連れ行し　蝶夢

振のけて寺社の先にさくら哉　味舎

解きて梅盤よりも白ひかれ　山川

さくらく年をしけ色さくら哉　宵月

糸ゆとの来るまでとゝ桜の郷　篤老

山地より山けり行く桜の散　怡翁

梅花の香乱さくらさくら哉　知岳

咲けぬる間やさくら花盛りとて　柳江

松あれハそこまで見ゆる桜かな　武凌

仮茶屋に人の立み合さくら哉　梅笠

遠櫻して松かゝるさくら哉　友之

甚こともひしほまちや二ちる桜　通甫

花さして翔くて春のなかりけ里　永年

手枕の夢みさくらのかきしかれ　蓬村

心よく桜ともせん晴まくら　五明

人のりゆきくりわさくらかれ　桐雨

分入まさくら一本に茶家哉　多よ女

さくらさく山家より嫁貰ひけり　駄六

見歩行も人のさくらとなりし鬼　可志里

木啄鳥の外に声なき桜かな　横雪

嫉妬もちりても見てさくら哉　雅文

浪士よりいくつのさくら散り来し　淑中

色のあくまで雫に桜かな　兎月

花のけしき夕ぐれ迄はまたれけれ　伊勢　柴人

面影のとりつきさのゝ桜かな　柳江

言ひの花しまはなしはちる桜　桃隣

油断して世を家らさくらかれ　標良

夕されのけふまゝてさくら哉　春素

さくら咲や根の桜きはまりけり　鶯浅

木綿屋の出る源や折さくら　丁知

一僧舟からも見るさくらかれ　史子

庭掃ゝもしこその桜かな　江戸　よし鳥

飛石のうへまで掃さくらかな　鶯居

寺の月きゝ屋や桜きゝは返り　士朗

麓寺あくれぬうちのさくらかな　李風

一つさく鳥のなけれはさくらかな　柳居

ちるさくら一度に照る月夜哉　寒松

羅漢寺のさくら朝行盛り哉　有月

夜のうちに花やさくらのちりぬより　等居

ちりそめてむやこまやし桜かな　瑟池

畑ぬしらさくら伐るにぬかけり　江三

八重桜

奈良は七重七堂伽藍八重さくら　孝式

八重さくら咲くきさまのまいさく　祥亜

除けてよないもの花八重桜　不及

八重桜今の絆ぞよ見まもや　笠芸

遅桜

それもとは家持けり八重桜　梅間
一本ハかなしきや遅ざくら　也有
旅人のとの十日も寛く遅ざくら　羅城
ちらしても遅きや来訪や遅桜　涼兎
万日の人乃ちりきや遅ざくら　其角
有明のもつくと遅ざくら　史邦
継木や芦葉に掛ざくら　一具
遅ざくらおのがころ花あれけり　月居
日あたりよい雲まで掛ざくら　一映
深草や霞の里の遅桜　梅室
皆ひとの扇にさして掛ざくら　井丈
遅ざくら掛むひらけあさき袷への那　百歌

花

花咲て七日鶴見る麓かな　はせを
暫くは花の上なる月夜哉　仝
花に風軽く来て吹酒の泡　嵐雪
何事ぞ花みるひとの長刀　去来
人は人を恋のもろさや花の春　其角
それ折て人の旅にや語らん　仝
顔うちも笑ふも寺ま尾の花　丈草
花ありに蔓よ柏の古葉かな　路通
それに傘ひらけて居るや名所　杉風
咲くとのと花見ける比の花かな　李由

花に飽きて帰るさ嬉し丸頭子　蕪村

山ふかみそれに出つきし杖の先　某更

心あると動くものかしそれ鶯　暁臺

もれくとれ哉く花のまそれ　夢太

さむしろに鉄抓くそれの宿や菜　几董

それとなる桜と緋め見えそれ媳　白雄

花咲く夕ありさんば蘆の那　仁里

色かよ豹してもの継其のれ　枝宝

羽織着てもひれ女か那　仝

長居して名を呼きけりもの礼　人ゝ

それ扇り謡のあしも汐手揚手　朱洋　冨秋

菜の花くろの本にもと朱まけり　若冰

夕紫やそれのあたりの歩く歩行　呼牛

狗風もそれに髪もれむしのそれ　正慶

それの山かりてみそれは風まれし　一具

夫川ら七や櫟の漢戸来よもの岸　仝

かごつけて歩まをそれのほうそれ　貞祇

只秋芽と青かてくらよそれに鶯　青人

花よ見ず画にきひてくわすいけ蟹　利兕丸

啄木鳥の枯木さるを中もの中　丈芽

もをうかし中果都のまてり合　之桂

久る寺に桜花をぬそれの山　巣兆

下戸縫て花は霧なりや花の影　一晶
ちれ淋し京見る人の耳もとく　九歟
花の枝や出てくる雲のあてもなき　小柳
お庭まで家数すゝんで花の奥　貞山
小半丁庭くもれの場はられ　方花
峯の雲かしらがもまゝの会し　登哉
端場も出よ浮世をちれて齋　重厚
まろまろと能く咲たる様き見　雲雀
ちれ咲もむなしけるる花木花　木節
花折るや手ぶりの袖のありなから　西湖
下闇もてらされし花の山おろし　後府　井梧
桜狩も忘るゝても花の咲うち　渭仙
さくらしま見るうしまゝものちりまま　鬼貫
二三日あるゝ実も結くやちれは人　一飛
ある絵の絵ひしかの花も散　乍兆
ちる花のまゝひまや松の風　月居
みそらりのかまに桜のちらりけり　岳輅
菜の油しかの所の鬼屋　杏五
花の月は絶の散りまとのまゝ見　路芥
花の出る雲うけたり　菜静
さくら盛なくりふ振りけるる花の上　宣
ちゝ咲くにさしの道も桶への花　南枝

旅心ぬけてしまひけり花の影　手市尚
人に逢ふ時のうれしさ月の中　素樸
山路も一足つゝの桜かな　里女母
来ぬ人をものつれと思ひけり　湖宕
たつぷりと霞むや花や朧の月　抱琴
月の戸に生てゐる也むしろかれ　丢亮
夕顔の新ゝ人をとしきものゝ遂　成英
只居ても思ひまさるや月の暈　双鳥
月の中昨けふもくるしき羽ぬける　桃隣
宮の池その雨しやら煙る月の中　流芝
朧にて見るより月の夜只ひとり　蒼虬
朧月は夜の目をさます花の山　永年

月の枝入りし風を招りけり　湖鶴
ひやつくや人静りての市の月　抱儀
こぼれかゝる桔梗のあり世に住くて　杉長
花見りてうこに友よやすし住居　江戸　年波
蛤かくや今年も月の行まゝり　下毛　鴎石
出てくいりとうるもゝとの月の霜　素翠
夕風や月たちまちしれて居成　味舎
淋しさは湯で出ひかりそれの影　慈光
月帰く雑みのつくや半夢　こゝろ
家路に居て見る人や一花のもと　麻文

ちらしあとも里は深入たりけり　松什

むの中出ぬけふのなまもの秋　一肖

りうてくあらふつきるやむの中　花晨女

見残しのあるやきまき咲残り　六〻

山も渡発せまてる新らしく　平角

花の遠まるつらいて動くなり　護物

それ鳴て大繩つるやむの真　岱年

まかしに貞むかしや松のむ　松隣

むまり咲かしてさ餘りけり　毛紉

花に寄て蝶の浮あとねむけり　卓池

紙綱むしけりて上りけり　虎山

山おろし袖に薦ハるきれのつゆ　通甫

我ままといきるむのこまの部　路通

一漕の花襟小細やきれの山　貞祇

あかれ錦何やらやしむの中　山外

大風の後や一日きれの雪　禾木

簾のむ集のま返くおちる免　乃蓋

見てよせ薮にちつるむの松のされ　学朗

秋まよるの事もの野にる雪　外六

遠山と志らしきちれ木字され　乙二

むのまや霧の下闇の初紅葉　完来

それの山友まち木小りけり　萬之

花盛

咲ときハ花まて見ゆるちらぬ花　花六

花のさかり往居りしてゆきける　文遊

花さかり飯くふてゐる人もあり　其角

永年のよるとは志らぬ花盛り　宿月

押よせてあれは山さへ花さかり　玄来

兎角して雑きされ花の盛かれ　花外

ふいと見て来て見る花のさかり哉　繍鶴

なまれては帰る家あり花盛　来笑

花さかり大猿中ゟおりけらし　松風

眠のうち花の光りやちれ盛　茶須

雨気りしから花の盛かれ　麗乳

ふり居ても大切なりそ花さかり　惟然

このまま家の鯛さくさま花盛　左明

手折れも枝の手あてやちれ盛　黄山

花盛り雪をかむり来りけり　萎須

雪雲とあれはいまし花盛り　花雪

花さかり数よりおかハかりけり　標雀

花さかりちらしなあれそ咲　晩篁

大門の月のあるなり花盛　然年

業の数よいふ一しも花の盛かれ　小圃

散花

ちるは花ちる時代をかへつる花のちり　其角

ちる花や平生しれぬ人の良　標良

花雲

花ちりて浮世に雲ハなかりけり　重軌

ちる花もとまりおくるゝ鳥かれ　助宣

一雁啼あらしや花ちる花なし　蕉夢

ちる花ハ猿も人らし　東泉

かれらハ〆人の梅も松ハ花の数　色花

ちる花や日まくられのあまる雲　桂量

とふまもちる花なり月の朧朗　恒丸

ちる花や常〆雲も石の人　巣兆

なかくと心あつけし花の雲　木洪

ちる花の一本にせまる深山かな　双鳥

花の雲鐘ハ上野か浅草か　はせを

柳なりしや天の川ハなかりし花の雲　越人

遠坂に華のあられまぎれの雲　嵐雪

花の雲降とゞまりもせざりけり　千守

余所ならし尺く体あや花の雲　西月

花の雲世と一つらいの入りか那　卯七

名古寺けふハ出やうき花の雲　卓池

浦嶋が子も陽まらし花の雲　湘中

花曇

あつらへの天気なりけり花曇　史邦

花くもりかけぬ桜もあらし山　一宵

花くもり風くもりして暮にけり　氷狐

風やく煙りも柾あり花くもり　貞祇

花雨

浮雲の晴まちかねる花くもり　護物

花のもと立されハ男の文黒し　暁臺

足跡なく傍より出て行れの雨　士紋

花の白鋼に塩もる夕アヽの紅　仙化

花の雨晴ぬを静めて晴にけり　蕉笠

五器よりよ濡人もしれ花の白　葛山

花の雨小袖着て帰るや　永花

花の白せんうきれくうる哉　杉俣

柳よれ散りしきをみれ花の白　恒丸

花や白あめや花よて本六は　桂堂

見れさらに白や閑さへ暮深き　花六

木かさ人よせて往生中や花の白　蓮芳

花吹雪

花見へせぬなうりける花吹雪　姫山

川波よ折りてや流く花吹雪　夷則

晴て別ゟ春行雲やまれ吹雪　祖江

花見

景清も花見の席やに七兵衛　木世紋

一僕をつれし出行花見かれ　季吟

真葛の様もくれる花見かな　許六

侍の宅家様書なれ見への花　梅室

片ぞりてきせるいてく花見かな　貞祇

みな人別より都の人や花見舟　雅披

旅人も許されて花見哉　阜池

又のとしさくらに連の都りけり　比古
陸と舟連てたひる川のさくら哉　五葵
関のないゝをあけて星さくら哉　芳頃
犬ころを連てさくらの庭かな　杜有
うましくしさくらく庭の懐手　盛英
一本のさくらくとさくらかな　松荘
寄りつとりかゝる人かさくら哉　格亜
くさひきとらくさくらの迎かな　耕雪女
年ゝ乃りきの人やうのかはりけり　士朗
さくら哉母よつれ行めくる兒　其角
庭とりてあれと庭つぬさくらかな　心河
仙鶴
さくらませくく人乃紙の余りけき　濱了
八重のちりをねふらしてさくら哉　助宣
庵籬のあとさき見ゆるさくら哉　傘下
家の主が経よみしさくらかな　葛三
手斧能をかけてるさくらの雪払ひ　桂五
金堂のさくらて高く庭のさくらか　伸女
昔ゐくと金堂が夢かくさくら哉　蒼虬
さくら中白むうらゝと寒さ也　玄来

花守

花守よ居しぬ竈よかりて薩　杜蔓
まもる中筆てかゝく取酒の法　庚年
まもれ守の名をとゝにてまもれ気　東湛

桃

年〻やむかし宿の薪一括　士朗

むかしの山路はら小田の行あたりし　乙二

花さくの梅わけよみゆる出恵れ　護物

桃咲ぬ旅人ゆかし桃の花　文考

有明や光生ほさきる桃の花　北枝

薮のけや馬の鼻うく桃の花　孤屋

汝園ひの外に家中の桃の花　佳年

翁く嘆きの梅の出来しく桃の花　櫻堂

酒さまさて笛で出合ふ桃の花　白雲

麦のみけりくれて桃の花見桑　大江丸

蓬餅る桃の咲やや垣のきも　手鍋

年よりし子よ出来けや桃の花　越後 安雅

あゝよ来く嫁りやさし桃畑　浮蘆

白桃やまかせけり髑髏の下　柳居

とめ不わきく個のうきやまの花　荷吾

まし種の素性も知れぬ桃の花　梅室

鞍あくて馬おりけり桃の中　小柳

田のよ出きく家やまくよ桃の花　伯臺

家々ら見てゆれなし桃の花　柳系

ほのくと家の果のもの花　丈河

いあけく家々ちる桃の花　之桂

桃さくや春あく風のあらしよ　確巌

菓子盆にけし人形や桃の花　其角

日うらにて茶店仕舞ふ桃の花　月居

ゑのころと雌母鶏や桃のかれ　大梅

山越せて一村ありくりしの花　眉山

喰て寝て牛にならばや桃の花　蕪村

鍬崇ひかの前句なるすけ里　蒹不

記咲のあたれさなくそまの花　葛三

黄鳥も嬉しく行し桃の花　一草

打こゝろ浴てあしやわか花　護物

うちむきに本を刻む桃の花　白雄

屋根替の煤落つるや桃の花　乙州

梨花

馬の耳すぼめて寒し梨の花　支考

なしの花咲や照るよりしみ秋　吾仲

嬉しれし枝をれしとや梨子の花　蝶夢

花の外に都かひ八重し梨子の花　尚白

梨の花月に書よむ女あり　蕪村

うられ家や梨子一本の花盛　闌更

ひとしれしもれしたまに梨の花　完来

清くして庭にあるや梨の花　一具

海棠

海棠の寒さまだみえて咲にけり　乙由

海棠や雨のあとの額の花　希因

海棠の影のうつろふ屏風かな　梅室

辛夷

海棠や誰うつすける様まで　暁臺

海棠や寝へあるぶもの春　五明

海棠の雨や錦の濡る柱　布席

三日月の風情や辛夷哉　尚白

風吹て崩えしまの辛夷哉　巴水

藪越しに風のゆるみを咲辛夷　呉老

雉子一羽起て辛夷の根明ける　白雄

山寺に生きて見て来る辛夷哉　芭蕉

花の人往所寂に辛夷さく　湖中

躑躅

和しき女松生えふつしかれ　尚白

山寺やつゝし刈尾のほとり　採丸

鐵ノ岩のまゝを見よやつゝしかれ　洗象

見つけた白の句やつゝし山　南枝

つゝし咲けく麻衣を通り見え　寒松

木つゝき来てわるる箸よつゝしさく　芭蕉

来る人を連して見るつゝしかな　花晨女

生る花焼野の原まるつゝしかれ　鱗什

経よしのさや清き入りまちつゝし　而涛

右左り歩みの戸を漏るつゝし哉　秀以

小家居に菜子の神かつゝし山　其角

垣根にはつゝしの棘や塚の寒　重芝

つゝし咲て片山里の飯白し　蕪村

山吹

崩りしも淋し山つゝじ　素梁

ものゝく株に草木のつゝじかれ　斎潤

大切にされて植ゐしつゝじ哉　雁嶺

石切の手拭をかけてつゝじ哉　芦之

山吹や宇治の焙炉の匂ふ時　はせを

山吹にあふ水ぎはの崩れ哉　越人

山吹や落しかけたる杉丸太　百明

杉的に山吹らしき杉の末　野衣

山吹に蝋燭とりし雲の下　鶴聲

山吹や千々に流るゝ元の殻　乙由

やまぶきに宮子と出る塒半　標堂

山吹にしをらしくあり椹浴　一具

山吹や塩の媼ハよくあそし　湖中

岩吹を越して出る寺の垣　遊語

山吹や古かれし風にそよぎ　北枝

山吹や川の中より出る花　希因

山吹や咲りとりせきまきを　千輅

山吹や田毎遠入我く紅　浮萍

山吹の縁をたてて姿かな　楳武

山吹のちれハちるなり田の畦　桓丸

山吹に袖さはらくの山路かな　蝶巣

いさ汁にハ童山吹のなかなか　暁臺

山吹を崩ちるや[illegible]鳥の所　白雄
山吹に池尻細りたりけり　若非
山吹や何事に[illegible]岸の鳶　五鈍
山吹や池のまはりに[illegible]　蓼太
山吹や垣のおかみも庵の主　茂之
山吹のとまるれたる垣根かな　素鏡
山吹や自然の庭を囲ひけり　白獣
月雲に山吹ちるの春部かな　其角
手を折りて山吹もちる庭かな　禾木
山吹のひとりわかるる春の末　素樸
山吹の雫の下は小家の郷　梅室
山吹や低い雲に馬乃みち　雨塘

木瓜

旅人も世てけり木瓜や茶の中　茂哉
砂川や[illegible]木瓜の花　猿雉
花せきに春の[illegible]や木瓜の花　梅旦
日なたけや古井に木瓜の咲乍し　保吉
馬の子は塩[illegible]木瓜の花　一貝
足の血を木瓜に裂けん木幡越　山川
木瓜の花牛三頭ほとりけり　旦郎

沈丁花

沈丁の香にほひてやの月　三津人

木蓮花

木蓮花鈍に[illegible]けれ　手那
おもしろき桜のあとや木蓮花　尚白

物いはぬむしやまくらの李かな　安静

志んに茶せんもれば天目蓮花　貞囿

子に後る田畑も持たぬ木蓮花　斗外

李花

盛すぎる蒼うけしる李の花　尚白

さくらの日にちりかゝる李かな　通雪

李咲や貧なる女住やさく　成美

杏花

さかりすぎて唐の李の花　貞徳

唐のものや菜師のひとりまへ　等回

連翹

れんぎやうや菜に山吹を植させる　巴静

連翹や柳に付て雪み　麦雨

れんぎやうの匂ひや庭の風味かれ　路禾

連翹やもつれし旭の這入家　寸長

れんぎやうや柳の枝に山吹を　湖舟

れんぎやうの葉に花咲て散るの時　蒼虬

れんぎやうの花の尾にしれ　月居

連翹や時鳥りの雨一日　九起

槿花

古桶や二文槿かもれのさく　一茶

五加木

うこぎ垣しやこの衣を晩きけせ　几董

登てもおいきやうそいりしま也五架木飯　鬼貫

櫻草

武国に草も桜と咲まけり　一茶

小米花

小米花奈良のまちや鶴住家　万平

はこへ

遊びの子も駈まい時そうらへさく　其気

菫

山路来て何やらゆかし菫草　はせを
堤よりおちて流れハ菫草　馬莧
鼻紙の間にしほるゝすみれかな　園女
ちらちらと菫咲けり西日影　蕉乳
低塚のちらけた人のある菫かな　涼菟
鮒の子のありて水ある菫かな　永保
鞋の身に菫をのせて手を連く　梅室
不動にて祇園の菫ありたれ菫　樵路
あるかぎりあるは菫に口をしき　芦夫
紙広て花色むらさきかな　暁臺
行や家菫のあれの濃き花　白雄

名もなしやかれなりし菫草　由誓
矢一すじ投ひ出しけり菫　節文
山せまく洲浜ましき菫かな　之道
戸口にてむしろ菫咲けり　一草
あつふさ菫み色捨けり小松橋　楳兄
飼育てた牛のつまみや菫かな　手踊
何時来てもつかぬ去年のすみれかな　忠知
川越えて皆流れ浅き菫かな　為よし
捨あけし小田の芥や菫草　百明
ひと枝つゝ折り来て菫かな　葛三
去りしや山路のすみれ人を吹　可秀里

能なしも出しおくれぬ白菫　謹物

茅花

泣ぬ子なしにつまみ見ん茅花　月居
名のない所ほどちんぺんさ茅花　天外
四五軒の村や茅花の多き　九嶽
佛にひや揉まれて茅花ぬく　寸長里

青麦

傘合すき青麦の麦の直しあり　仙化
一軒の一露くけやむきのいろ　素丸
麦青し初影集りの笠並ふ　五東

草麦

草麦の枯に一葉となりけり　永年
草麦の穂に草永し小糠雨　芦窓

三月菜

提桶皆のたみ放ちて三月菜　方水

若菰汁

洲茂の掃なであり若菰汁　一映

麦葉

甚葉のけさはいつまなりけり　秀九

蕪

草餅くゐ付けるさや蕪乃花　まさ紙
風かくて静まりけりのまれ　杉風
豆腐屋の袋かけてやしりの花　東之
蕪の名れ去てまうれを過ての花　士朗
山かけて菜の花むこや蕪のたれ　蕪村
雨の日や中にてすゐやしりの花　銀文
京画をすくり掃やお蕪の花　万頃
先提ひの襷縫しての花　碓山
傘よりしぬかまとりけり蕪の花　五夢

そのいちぬ人さゑうけり蕗の薹　成義
雪まさくる垂くも蕗し蕗の薹　揚月
山なる蕗よりいすり出ぬ裏まで西　寒松
瓶せ冬家こもれる蕗の薹　梅室
蕗咲くて松魚の芽の葉へけり　其角
近くて雑不むりけり蕗の花　織鶴
静るかく志まりて蕗し蕗の花　お擇　雪操
重さけと動くや蕗の芒基里　可吟
坂おりて常のゆるみや蕗の薹　護物
蕗咲て地よ届くりの出さられ　渡鳥
咲のけく遠州のさくや松の蕗　壽潮

やらそ鉀へ雨さえりけり蕗の薹　一映
蕗の薹おもしろ苔くさけり　甚雨

蕗生初
蕗や生初てより野は雨　白雉

蛇出穴
山蛇の起ひて出るや裏の畑　朴斎
蛇穴を出るや魚子もまたその　竹馬

田鼠化為鶉
鶉とよ風も越まられたり　成美
鶉とよ化てたまかり田の鼠　蓑虫
田鼠や春に鶉乃衣うへ　梅室

麦鶉
こしき草麦ふかし夕鶉　五明
麦まて露けき鳥八先まれ　寒松

蒿菜
蒿の菜や形りよ似せてゆりまま　蕉光

鶯の巣や山へのりの出るへし　林芳

郭公巣
ほとゝきす巣に居らは八峰を出ん　故鶴

鳥の巣や何処きてもほとゝきす　闌更

鷺巣
鷺の巣や松の葉越しの星明り　愚心

入巣鳥
雲にさへ入る事本の光かな　菜更

さうしの月ものけさは舟のあと　慈光

今ぞ見し鳥も巣にかへるしの　梅令

鳥さへ人に古巣のわかれ哉　素外

鳥帰
菜の花や鶯の花や小鳥ゆく　芝蘭

さても啼く去ぬ鳥かけし門の柳　夜来

呼子鳥
虎杖を折ぬら汲子ぞ呼子鳥　万和

引鶴
鶴の引く遠山も中々見えて　月居

引鶴の大空よりも新浦なれ　其散

引鴨
引鴨や潮和ひらく舟の岸　湖準

うらゝか
舟さきに浮ぶ一羽うらゝかに　萬和

武士のうち入れて濁り無し　荊口

桜鯛
鯛市のけひきもなくて桜鯛　鷺氏

若鮎
鮎の子は白魚もてる瀬の音　土芳

鳴くとも…つゝく小鮎の水　圓外

鮎の子は白魚知らるゝ流れの部　其世統

若鮎も精の一滴と見えぬなり　才麿

鮎小鮎雪の雪を…の部　素堂

撰して出るは家とし小船波ゝ　李曠

船波に桃萬盆かられけり　古拳

讃ものくらら波の小船かな　遅月

我をのさ浪ら船と取小船のかな　休窓

春霜

傍ふ世の底に押ス水のてる霜　而后

別霜

水く流されて込き霜の下なかれ　千那

初秋浪秋の鐘つきやとし下霜　松吟

川瀬まさ青菜尺にて下きしま　由誓

只なし女軒のまきやかられ霜　幽溪

黄玉のさき落つる汲かれしま　圭布

浅舎う明ともるしりかつき霜　篁廬

春雨

若葉の世にも志られけり　一具

けふきりて行枝椿やはるの雨　其坡

花ちる女の枝にも降れかられ雨　角丸

春雨や降の巣つてる屋根の漏　志也猿

もるる雨や鶯遠く石燈籠　杉風

春雨や巨燵のかへ足出し　来山

もるる雨や桃の川々涼し　交考

春雨や何とつらん此塚原　丈草

桃の花江戸を降也春の雨　鬼貫

春雨やむさしのの心あり　貞室

もる雨や隣しきもの枝つゝし　其角

はるさめや野にも海にもさし遠干潟　梅室

春雨や草をも隠す虫のうけ　由誓

はるさめにぬれけり宮の若緑　月居

春雨や庭に亀の子を運ぶ　杏五

はるさめに雲のうつりて垣根かな　住年

春雨や傘さしかけて蕎麦かな　曙菓

はる雨や出かけて一人野の猫　芳阿

春雨やねまりて一ト布入　慈光

ひとしきり消えし芽や春の雨　呂川

畑しりしりとぬれても春の雨　浪花 数外

はるさめにぬれぬもうらし花の雪　蕉窓

春雨や枯木の人に降りにけし　暁臺

はる雨の白木無雪のぶみて降　古翠

起しても降るものは春の雨　梢山

茅萱もけふは菜つくれものおもふ　岱青

一日は内にあれども春の雨　蝶夢

春雨や人住てけふ壁ぬる　蕉村

はる雨や桐の芽つゝむ伐木口　巫好

静さを壊すや春の雨　通甫

春雨や筆も梅さし　桐之

はる雨に染ぬまで柾の艶　士朗

梅にしも世にも晴るゝ春の雨　乗月

はるさめや木にはなれゆく浜の景　乙二
春雨や聖ありとし山の上　万和
傘のつらぬ日のありやなしや春の雨　有節
はるさめにうつゝも庭の竹うれし　卓池
枯枝に柔の芽ふしはるの雨　桃首
きのふけふ降暮べきとの花の雨　善人
枯蔦に春雨もろく垣根かれ　大梅
心ゆくものや山田の春の雨　護物
なまぐさき畑のけふりや春の雨　波月
春雨や掃ぬ古葉のうへふかき　非古
銅鍋の古びを拭ふ春の雨　江戸　沐傑

風邪の身のつき合酒や春の雨　助宣
舟橋をおろし山ほし也春の雨　南枝
春雨はつれなく降や三井の鐘　蘿虎
菜の花のむら道高家やはるさめ　桐堂
戸尻りしめりのきはやはるの雨　黄山
はるさめや兎古巾の夢をみる　三津人
傘さして肴売るやはるさめ雨　汐雁
春乃雨合歓に桂の楼さけり　江月
はるさめや傘さして畑まはる　斗芝
嫁の来て板の縁なり春の雨　郁曲

春山

鐘つきてとまるまゝや春乃山　成義

春の山杉君の袖のよくみゆる　蕉雨
はるの山一川をはさて隔りけし　一貞
出くるの一日鏡をはるの山　由誓
春の山花ぬ草は津しぬ春し　里平
はるの山宮ちかくみえにけり　梅室
傘させし傘のうちなり春の山　千稲
春の山無日近く暮けり　茶静
今建し石の鳥居やはるの山　和戎

春野

はるの野や来たれと迷の出会せ　沾徳
雁味噌あらばはるの野をと成会せん　許六
はるの野や長きものの猫まつく　朱山

春海

かりよす鰍の光や春の野ら　杉風
蝶ゐ舞葛をおとる春燈かな　貞室
春の野や萬ふ出種を以て其る　峻雪
見て行く春山春川やはるの海　芳川
松々け帆いなりけるはるかなし　不卜
遠よみえく浪のけり春の海　三千春
春の海終日のたりのたりかな　蕪村
はるの海浅きと見すまほしける春の海　蒼虬
帆柱よ帆のかかれけり春の海　蓼太
百里ゆく雲の帆や春の海　午心
春の海よ流れ出たり鄙音　寒松

春水

春の水ところ〳〵に見ゆるかな　鬼貫
うつくしき錆うきけり春の水　舟泉
春の水よ林の木葉をやそき之　嵐雪
春の水かろく鮭出の流しらを　其角
春の水まつさ小くさきかん池　芭蕉
梅の汁のゆく猫や春の水　山馬
椀打ハきさ鹿や春の水　成美
人のりて人出や春の水　巳南
禅山や小松か井をはるの水　几董
酒呑ぬ川越なし春の水　素文
おつめて流ていやさるの水　鳴朗

小座敷に流けり春の水　嵐蟹
小男鹿の足消しけり春の水　完来
源氏柳もなき春の水　蓼太
倒れ木もまさしや春の水　梅室
手綱やへ流して春の水　一畠
春の水家あるこの人流せけり　桐人
流れ春もなさや春の水　一映
座石の下流れや春の水　乙良
池かしよ流生出けり春の水　こゝろ
君まらく春の水　月居
足あとの跡も春の水　素分

いく筋も那ぐとつまてるや春の水　文羅

鴨川や色うまくとのまるの水　花椎

とく出るて薄まゝりけり春の水　示蒙

春の水雁書と之人わすりけり　樗堂

きゝの水山有きゝ國ときゝれけり　萬村

春の水子供の呂袋とぬらせけり　一具

流きこられく流もけり春の水　四明

春旅

ひとりとら思えて春の旅まろ　一貞

夏隣

ひとき田の草へかけり夜まれり　鶴兆

夏近

夜近き安やさしまるかり　桃唐

蹴のう坦蒲なされて夜近し　千稲

行春

行春とおしきのとしらけり　左衛

ゆく春のあと坊音ものこしけり　照豕

行く春をあはれむ外のかけられ　士朗

出る春や乾しさく雨露草　古羝

行春と陸むとりくれのまぬかし　也有

ゆく春や野し春をかなすあり　とよめ

ゆく春やとしをとうつく縫の妻　山川

ゆく春や鶴二年のよしぬき露　三津人

行春や土橋のうへのたまり水　祖丸

ゆく春や斜先よ立けり岸の松　横雪

行春や相行し雲よ山路雲　春嗁

行よりもつきゝものかれ春の行　二三

行春や行ところなし雲の行　通甫

行春や背戸門あけて春雨　並衣

ゆく春の舟にもらんゆふ山端の外　長斎

行春や牡丹よりつる人もなし　二柳

ゆく春や鶴の巣まのたくひとり　百花里

行春や法師先生なき後遊れ　塊翁

行春をかくしより蝉さしか　斧湖

行春や畑にかりし背戸の山　手舷

行春や見おくりし行橋乃上　方頂

行春や絆に紙のつく命かな　朱芳

暮春

浅川も入てて春行戸口より郎　芝窓

行春や伊くれゆく山家の行　素樸

帳一つ蚊に帰らぬ枝すて春の暮　雲五

まくらまつ見えずして暮菜集　林江

花まじり嫁入りつくもてなされ　通望

機らしく拾ふ出て見ては春の暮　正竹

情春

床の上ゝ伸ながら夢や夢の夢　其山

手習して座ふむ人や春をしむ　葦村

春惜しむ十とせ年ゝ思ひけり　月居

春別

如ひきして傍ゝ春の名残哉　標堂

白拍子みんより春の余波なれ　百花里

春送

二月盡

はなよこれの羽織を春の名残かな　梅室

鶯も暮く春を送るや白むかし　其角

三月とみる鶯の音も名残なれ　去来

咎さらりかなをちらり也猫生き　宗朋

三月のかくれ家ともや門乃海　枕流